

【未定稿】
令和元年12月20日現在

熊本の学び推進プラン

未来の熊本の創り手となる子供たちの学び

本推進プランは、平成31年4月に熊本の学び総合構想会議からの提言を受け、
県教育委員会が策定する義務教育段階における学力向上に関する計画です。

令和元年12月
熊本県教育委員会

くさくさ草の物語

くさくさ草の物語



ま え が き

「熊本の学び」総合構想会議は、県内外の学識者や企業関係者、保護者の皆様、学校関係者から構成させていただき、平成30年5月、熊本県教育長から諮問をし、9回の協議を経て、去る平成31年4月15日、県教育委員会に「提言」をいただきました。

本会議を設置した背景をなしたものは、本県の課題をどう克服していくかということであり、社会の在り方そのものでさえ、「非連続的に劇的に変わる」時代の到来を目前に控え、今、どのような取組が求められるかということでした。それは県教育委員会として、将来を展望し、熊本の真の創造的復興を成し遂げる子供たちに、今、「どのような力を付けなければならないか」という根本的な問いに向き合うことでもありました。

協議は、熊本の未来を創るすべての子供たちが、それぞれの夢と幸せを実現できるようにとの熱い思いと願いから広範多岐にわたりましたが、「提言」では、熊本のすべての子供たちが、「学ぶ意味」を問いながら、能動的に「学び続ける力」を育成することを目指すという理念の下で、三つの期待する学びの姿が示されました。

この「提言」を具体化していくために、県内の先生方37人から構成した五つのワーキング・グループで活発な議論を重ねていただくと同時に、大津町立室小学校・御船町立御船中学校・水俣市立水俣第一小学校の先生方に実践していただきながら、その成果と課題をまとめて、研究発表会も開催していただきました。

令和元年10月1日、「熊本の学び」推進プランを「素案」の段階で、学校や市町村教育委員会に示し、短期間に多数のご意見をいただき、幾度となく修正を重ね、ここに完成するに至りました。完成までのプロセスは、学校教育の最も重要なステークホルダーである学校の先生方と一緒にすることを重視したからです。

いよいよ、来年4月から新しい学習指導要領が小学校から順次実施されます。今後、大事なものは、本プランの実現に向けて一步ずつ着実に進んでいくことであると考えています。

いかに社会が変わろうとも、次代を創造し、よりよく変革する力は、「学びの主体」として、「学びの主人公」として育った子供たちにあり、それは、これからの10年、子供たちを中心に、学校だけでなく、家庭・地域・行政の5者が同じ側に立ち、「学ぶことのすばらしさや楽しさ」を子供たちに伝え、共感することによって実現するものです。学校関係者の皆様には、それぞれの立場で、目の前の子供たちに応じて、本プランに示した内容を主体的に工夫改善していただき、より優れた実践につなげていただくことを期待しています。

さらに、子供たちの幸福な人生の礎をつくる営みを、県民の皆様方に御理解いただき、御協力いただくよう息長く推進することによって、大きな成果が生まれるものと信じています。

本プランの作成に御尽力いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。

令和元年12月

熊本県教育委員会

【目次】

第1章	総説	P1
	1 「熊本の学び」総合構想会議からの提言	
	2 「熊本の学びの提言」についての基本的な考え方と具体化に向けた方向性	
	3 「熊本の学び推進プラン」の概要	
	4 四つの基本方針	
第2章	熊本の子供に、これからの社会を創り、未来を豊かに生きていくための力を！ ～教育活動の質を向上させ、学習効果の最大化を目指すカリキュラム・マネジメントの推進～	P11
	<input type="checkbox"/> 重点1 全ての教職員が連携・協働し合って目指す子供たちの姿を思い描きましょう	
	<input type="checkbox"/> 重点2 目指す子供の姿を五者で共有しましょう	
	<input type="checkbox"/> 重点3 教育活動を定期的に振り返り、更なる充実につなげましょう	
第3章	熊本の子供を、「学びの主体」として育てるために！ ～子供が問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める授業改善の推進～	P26
	<input type="checkbox"/> 重点1 子供の『わくわく』が連続し、『分かった』『できた』『もっとやってみよう』が生まれる授業を目指しましょう	
	<input type="checkbox"/> 重点2 「単元のゴールの姿」に向けて、「単元・題材のまとまり」で授業を構想しましょう	
	<input type="checkbox"/> 重点3 自分なりの問いを立て、探り、新たな問いへとつながる「探求的な学び」を展開しましょう	
	<input type="checkbox"/> 重点4 安心と信頼にあふれ、高め合う学級をつくりましょう	
第4章	自らの学びの姿を知り、次の学びに向かう熊本の子供たちに！ ～子供と教師のための効果的な学力向上検証改善サイクルの確立～	P75
	<input type="checkbox"/> 重点1 子供たちの課題解決に向けた教師の授業（単元）デザインにつなげましょう	
	<input type="checkbox"/> 重点2 子供たちが自らの学びをデザインできるようにしましょう	
第5章	自ら計画を立てて、自ら学ぶ熊本の子供たちに！ ～家庭と連携を図りながら、子供たちの学習習慣形成を促す取組の推進～	P85
	<input type="checkbox"/> 重点1 学習習慣形成の素地となる環境づくりをしましょう	
	<input type="checkbox"/> 重点2 家庭と連携し、子供が自ら取り組む家庭学習を目指しましょう	
第6章	「熊本の学び」推進プランの実施	P101
	<input type="checkbox"/> 推進プランの実施に当たっての留意点	
	<input type="checkbox"/> 今後の方向性	

1

総説

1 「熊本の学び」総合構想会議からの提言

- 平成31年4月15日、約1年にわたる協議を経て、「熊本の学び」総合構想会議から『熊本の学び』についての提言～義務教育段階における学力の育成に向けて～（以下「熊本の学びの提言」という。）が示されました。
- 「熊本の学びの提言」では、“熊本のすべての子供たちが、「学ぶ意味」を問いながら、「能動的に学び続ける力」を身に付ける”という理念のもと、これまでの義務教育段階における「確かな学力」の育成に向けた取組を、子供の学びの視点から捉え直し、以下のとおり、熊本の未来の創り手となる子供たちに期待する三つの学びの姿が提言されました。

【理念】

熊本のすべての子供たちが、
「学ぶ意味」を問いながら、「能動的に学び続ける力」
を身に付けることを目指します。

熊本の未来の創り手となる子供たちに期待する学び(提言)

【提言1】

ふるさと熊本に根ざし、豊かな郷土の創造と自己の
向上を目指し、能動的に学び続ける熊本の子供

【提言2】

問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、
学びを深める熊本の子供

【提言3】

自分の学びの姿を知り、日々たゆまず、
自ら学ぶ熊本の子供

(「熊本の学びの提言」から一部抜粋)

2 「熊本の学びの提言」についての基本的な考え方と具体化に向けた方向性

- 県教育委員会では、「熊本の学びの提言」で示された子供たちに期待する三つの学びの姿（提言1～3）の実現に向けて、それぞれに基本的な考え方と具体化に向けた方向性をまとめました。

【提言1】 ふるさと熊本に根ざし、豊かな郷土の創造と自己の向上を目指し、能動的に学び続ける熊本の子供

- どのような時代であろうと、いかなる地域であろうと、「なぜ学ぶのか」という本質的な問いの答えを子供たちはいつも求めています。高度経済成長期においては、高校・大学入試に向けた知識の量としての「勉強」が、その問いの答えとして説得力をもっていたことでしょう。しかし、急速なスピードで変化する社会では、知識の量だけではなく、答えのない問いに対して、正面から向き合い判断し、一つの課題に対して、多くの情報を吟味して、周囲の人たちと協働しながら解決策を探す力が求められます。解決に向けて知識そのものを更新し活用していく時代を迎え、「学ぶこと」は生涯欠かせないものになっています。「非連続的」に変わるこの時代に豊かで幸せな人生を送るためには、生涯にわたって能動的に学び続けることが不可欠であるといえるでしょう。
- 私たちのふるさととは、平成28年熊本地震で甚大な被害を受けました。ふるさとの復興に向けて支援をいただいた国内外の多くの人たちの力や、このふるさとを想い、たくましく立ち上がる熊本県民の姿を間近にした子供たちにとって、この経験は、予測困難な状況に対し、能動的に学び続けることの大切さを知る経験ともなりました。つらくもこの地震は、ふるさとの課題を表面化させることにもなりました。ふるさとには、地域の伝統や遺産など誇るべきものばかりではなく、地域が直面する多くの課題があります。そして、そのふるさとの未来を創造していくのは子供たちです。
- これからの本県の学校教育は、それらの課題を子供たちに考えさせ、豊かな郷土を創造するために、主体的に取り組ませるなど、それぞれの地域の宝を生かした魅力的な教育課程を柱とする学校づくりを進める必要があります。その中で、地域のよさに気付き、地域の課題を友達と一緒に解決しようとする過程（プロセス）を体感することを通して、熊本にしかできない学校教育の質の向上を図り、熊本に根ざす人づくり

を実現することができると考えます。

- 一方で学校は、特別に支援を要する子供たちへのきめ細かな支援やSNS等の急激な普及に際し、様々な人間関係のトラブル等への対処が求められるなど厳しい現状にあることも現実です。また、子供たちを取り巻く家庭や地域の環境等の変化も著しく、現在、バーチャル・リアリティ（仮想現実）の世界が加速度的に広がっています。そうなる以前の子供たちは、家庭や地域の中で自然や文化・芸能等と出会い、本物を体験し、問いをもつ機会が今より多くありました。そして、その問いに対する答えを学校の授業で自ら探究していました。このように、子供たちにとって本物に直接触れる体験は、学びの過程において不可欠なものです。しかし、現在、社会環境が大きく変化し本物を体験する機会は、本県においても激減している現状があります。
- このような状況を踏まえると、これからの学校は、今まで以上に、課題を家庭や地域とともに共有し、より開かれた学校経営をそれぞれの地域の実態や強みを生かしながら進めていかなければなりません。学校教育の中では、子供たちに学校で学ぶことと社会とのつながりを意識させることが重要になってきます。その基礎づくりとして、現在の各学校の教育課程を、地域のよさや強みを生かし課題解決に向けた体験活動等を中心に見直し、子供たち一人一人に各教科等の学習内容を深く理解させる工夫をするとともに、併せて、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育み、キャリア発達を促すという視点が大切になります。
- そのためにも、今回の改訂の理念である「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、本県では、学校・家庭・地域がより一層連携を強化していくために、三者（学校・家庭・地域）に加え、子供と行政を含めた五者が一体となって取り組むことが、これからの学校教育の重要な視点であり、改めて、学校の基本である教育課程がこの五者で共有されることで、この提言の考え方が具現化されていくと考えています。

【提言2】 問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める熊本の子供

- これからの時代を担う子供たちには、出来合いの答えのない課題に対応する力が求められます。実社会や実生活の中から、自分（たち）なりの問いを立て、自分（たち）

なりの方法で、自分（たち）なりの答え（納得解・最適解）にたどり着く「探究的な学び」が求められています。

- このような学びを実現するためには、各教科等における見方・考え方を総合的に働かせ、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考える「総合的な学習の時間」が今後一層重要になります。総合的な学習の時間の目標や内容は、各学校で定めるものですが、目標を実現するにふさわしい探究課題については、地域の特色を生かし、わくわくして学びたいような子供たちの興味・関心に基づく課題を踏まえて設定することが大切になります。
- 本県では平成13年度から「身に付けるべき基礎・基本を確実に習得させる徹底指導」と、「自ら考え、問題解決に主体的に取り組む能動型学習」との、めりはりをつける「熊本型授業」を推進し、本県の授業改善に一定の成果をあげてきました。特に、「教えるべきことは徹底して教えなければならない」ということを本県の教職員に強く意識付けたことは、その後の国の対応を先取りするものだったと考えております。新学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善をより一層推進するためには、今一度、基礎的・基本的な知識及び技能をどの子供にも確実に身に付けさせることが第一義的であることを再確認する必要があります。特に、小学校の低・中学年においては、学ぶ意欲を高めるとともに、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付けさせ、本県の「主体的な学び」の基盤づくりを進めていく必要があります。
- それらのことを踏まえた上で、今後の授業づくりに大切になるのが、視点の転換です。これまで取り組んできた熊本型授業は、「授業」の中で教師の側、教える側の視点から授業の在り方を徹底した指導、学習の在り方を能動型学習という形で示してきました。これからは、これまでの蓄積を「熊本の授業づくりの理念」として大切に継承しながら、授業以外に広がる個々の多様な学びを生かし、子供の側、子供の「学び」に視点を転換していきます。子供たちを「学びの主体」として育てるために、教師の深い児童生徒理解と質の高い教材研究など、確かな指導観に基づく質の高い指導が求められると考えています。

【提言3】 自分の学びの姿を知り、日々たゆまず、自ら学ぶ熊本の子供

- 今後、教育用AIの発達など、超スマート社会（Society 5.0）の実現により、スタディ・ログ（学習履歴、学習評価・学習到達度など）等を蓄積した「学びのポート

フォリオ」を活用し、子供たち一人一人に対応した学習計画や学習コンテンツを提示することなど、個に応じた学びが可能な時代が到来するといわれています。

- 子供たちの「学び」は、一人一人違ってきます。また、子供たちの状況は「多様化」の一途をたどっており、一人一人に適切な支援をすることが求められています。授業が分からないという悩みを抱えた子供たちへの支援にあつては、自分にふさわしい学び方や学習方法を身に付けさせ、主体的に学習を進められるようにすること、また、すでに十分理解が深まった子供たちに対しては、より意欲的に学ぶための課題を用意するなどの個に応じた指導や支援を講じることが、一層重要になります。
- そこで、子供一人一人の学習状況を正確に把握するための学力調査を実施するとともに、子供たちの学習状況を把握するアンケート調査等を実施し、より詳細に分析することが必要になってくると考えました。加えて、調査実施後に、子供たちが自ら学ぶために必要な情報を提供することによって、本提言を具現化していきます。
- 併せて、生涯学習を見据えた主体的な学習者の育成の視点や学力保障の視点からも、小学校の早い段階で学習習慣を確立することは極めて重要であり、学習習慣を形成していくために、家庭との連携をより一層推進していきます。

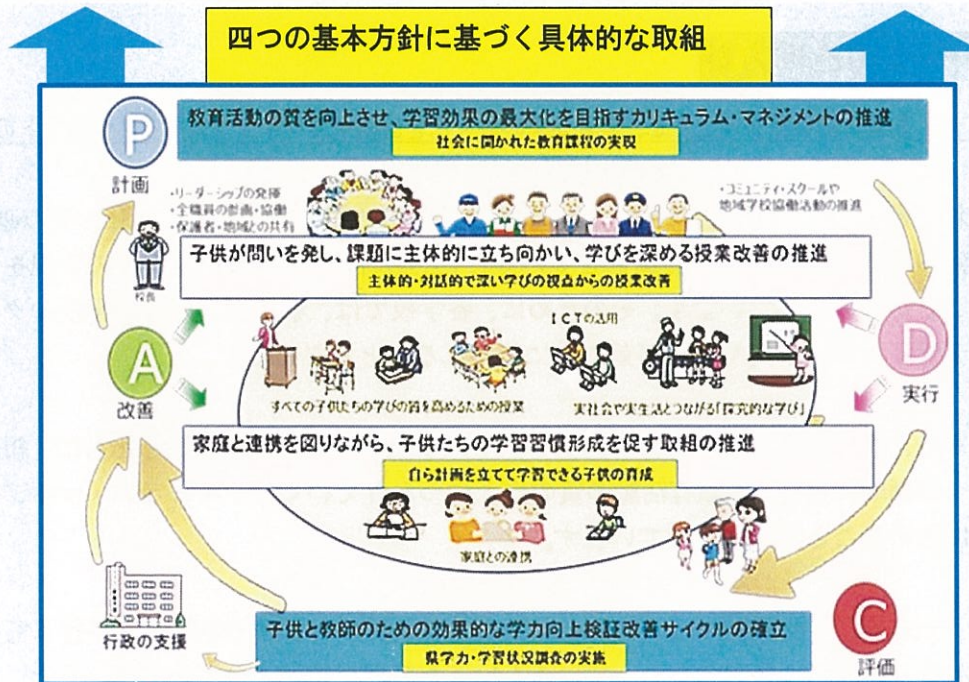
3 「熊本の学び推進プラン」の概要

- 県教育委員会では、『熊本の学びの提言』についての基本的な考え方と具体化に向けた方向性」で述べたことを踏まえ、熊本の学びの「理念」と「三つの提言」が実現できるよう、「熊本の学び推進プラン（以下、「推進プラン」という。）」の基本方針を以下の四つに整理し、全体図を以下のようにまとめました。

- 1 教育活動の質を向上させ、学習効果の最大化を目指すカリキュラム・マネジメントの推進
- 2 子供が問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める授業改善の推進
- 3 子供と教師のための効果的な学力向上検証改善サイクルの確立
- 4 家庭と連携を図りながら、子供たちの学習習慣形成を促す取組の推進

【理念】 熊本のすべての子供たちが、「学ぶ意味」を問いながら、「能動的に学び続ける力」を身に付けることを目指します。

- 【提言1】 ふるさと熊本に根ざし、豊かな郷土の創造と自己の向上を目指し、能動的に学び続ける熊本の子供
- 【提言2】 問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める熊本の子供
- 【提言3】 自分の学びの姿を知り、日々たゆまず、自ら学ぶ熊本の子供



- 推進プランの基本方針の展開に当たっては、各学校において学校経営の細部で四つのつながりを意識し、「一体的」に取り組むことが重要になります。

- 四つの基本方針に関する本県の取組の現状（課題）は、以下のとおりです。

【現状（課題）】

- ・各学校で育成を目指す資質・能力が、教職員間はもとより、家庭や地域と共有されていないこと。また、子供たち自身が把握していないこと。
- ・各学校の学校教育目標と日々の授業との関連性が少ないこと。
- ・1単位時間の授業に重点を置いて実践を行ってきたが、一方で単元全体で資質・能力を育成するという視点が薄かったこと。
- ・県学力調査の分析が授業に活用されていないこと。
- ・子供たち一人一人が、自分のつまずきを把握していないこと。
- ・家庭での学習習慣形成が不十分であること。 等

- このような現状から脱却し、子供たちに学ぶ意味を問いながら、能動的に学び続ける力を育てていくことができるよう、学校教育の改善を図っていくことが重要になります。未来の熊本の創り手となる子供たちの学びを、学校だけでなく、家庭、地域、さらには行政までも含めて、五者でこの基本方針を一体的に展開していくことが大切であると考えています。

4 四つの基本方針

(1) 教育活動の質を向上させ、学習効果の最大化を目指すカリキュラム・マネジメントの推進

- 新学習指導要領では、目指すべき教育の在り方を家庭や地域と共有し、その連携・協働のもとに教育活動を充実させていく、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すことが求められています。そのために、各学校では、学校経営方針や学校のグランドデザイン等の策定や公表が効果的に行われることが必要です。
- また、校長のリーダーシップの下、特色ある教育課程を編成するとともに、組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくカリキュラム・マネジメントに努めることが求められています。
- 一方で、学校現場では、カリキュラム・マネジメントは管理職だけが行うものであるという誤った認識をもっているといった課題が指摘されています。また、グランドデザインの作成等に学校総体で取り組むことができていないため、その内容が教職員はもとより家庭や地域と共有できていない現状や、検証改善（PDCA）サイクルが形骸化しているといった課題も指摘されています。さらに、全国学力・学

習状況調査の学校質問紙調査の結果等から、本県では全国と比べて学校と家庭との情報共有が十分ではない現状もあります。学校はどのような子供たちを育てるのか、何を実現していくのかという目標やビジョンを家庭や地域住民等と共有し、地域と一体となって子供たちを育てていくことが求められます。

- そこで、本県では、子供たちの学びを中心に、五者が一体となって教育課程を軸に、「つなぐ」をキーワードとして、学習効果の最大化を目指すカリキュラム・マネジメントを推進していきます。
- その際、保護者や地域住民が学校運営に参画する学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）や本県独自の熊本版コミュニティ・スクール、地域学校協働活動等の整備を加速させるとともに、研修会等を通して質的な充実を図っていきます。

(2) 子供が問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める授業改善の推進

- P3の「提言2」で述べたように、本県で平成13年度から取り組んできた徹底指導と能動型学習のめりはりをつけた「熊本型授業」では、1単位時間の授業の進め方を1つの「型」として示してきました。
- 一方で、今回の学習指導要領改訂で示された「主体的・対話的で深い学び」については、必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、実現を図っていくことが求められています。
- 本県児童生徒の課題から、主体的・意欲的に学ぼうとする状況や、授業において、例えば「今まで授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表すること」など、全国平均に比べて低い状況であり、伝える力の定着に向けた指導の不十分さとともに、受け身の子供たちの姿勢をうかがわせる現状が続いています。さらに、総合的な学習の時間についても、探究的な学習が行われているとは言い難い現状にあります。
- そこで、これまで本県が推進してきた熊本型授業による「徹底指導」や「能動型学習」が目指してきたことを、子供の「学び」の視点から整理・再構築し、今後の未来の創り手となる子供たちの礎としての学びとなる「熊本の学び」の授業の在り方について分かりやすく学校現場へ示していきます。
- また、実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、

整理・分析して、まとめ・表現するような探究的な学習の過程を大切にしながら総合的な学習の時間の充実を図っていきます。

- さらに、今後一気に普及が進むであろうICTを活用した授業においても、効果的な活用の際には、子供の学びをより広げ、深めていくツールとして、より一層推進していきます。

(3) 子供と教師のための効果的な学力向上検証改善サイクルの確立

- 平成15年度から取り組んでいる県学力調査は、子供たちの学力や学習状況を把握し、実施後の課題分析に基づいた授業改善等に生かすことを主な目的としてきました。本県においては、4月実施の全国学力・学習状況調査と11月下旬から12月上旬に実施する県学力調査の結果分析に基づく学力向上検証改善サイクルの確立を目指してきたところです。
- これまで、県学力調査は問題そのものが授業改善等に生かされるなど本県の学力向上に大きな成果をもたらしてきた一方で、実施後の採点や分析、及び子供たち一人一人の課題改善に向けた取組等が課題としてあげられてきました。
- また、今後の社会状況を踏まえると、スタディ・ログ（学習履歴、学習評価・学習到達度など）等を蓄積した学びのポートフォリオを活用し、子供たち一人一人に対応した学習計画や学習コンテンツを提示することなどにより、個に応じた学びが可能となるといわれています。
- さらに、各学校のカリキュラム・マネジメントを効果的に進めるためには、客観的かつ正確な実態把握に基づくPDCAサイクルを確立する必要があります。
- そこで、民間のノウハウ等を活用しながら、学校総体として、教師が授業改善の取組を進めるとともに、子供たち一人一人のやる気を引き出す調査のシステムを構築していきます。その際、効果的な学力向上検証改善サイクルが確立するよう、詳細な現状分析を可能にし、どの課題が継続しているか次年度に向けたアクションにつなげていきます。
- また、各市町村教育委員会においては、施策の検証に生かし、実態に応じた学校支援の方策の根拠とするなど、効果的な活用を期待するところです。

(4) 家庭と連携を図りながら、子供たちの学習習慣形成を促す取組の推進

- 家庭学習の習慣は学力保障の観点からだけではなく、生涯学習を見据えた能動的に学び続ける学習者の育成の観点からも極めて重要であり、段階的な取組を組織的・継続的に行うことが求められます。
- しかしながら、本県においては、例えば予習を求めるか否かについてや、予習と復習のバランス、家庭学習の課題の有無や分量等について教師間・学年間・学校間で大きな差が生じている状況も見られています。
- そこで、学校、家庭、地域、子供、行政の五者が連携して、子供たちの学習習慣形成に向けた取組の充実を図っていきます。
- また、学習習慣を形成していくためには、素地となる環境等をより充実させる必要があります。そこで、幼児期の教育との接続を図り、15年間の育ちを見通した五者の連携の在り方等について、分かりやすく示していきます。
- 次章からは、本推進プランの四つの基本方針に基づき、各章で「具体的な取組」について、事例等を含めて説明します。

2

熊本の子供たちに、これからの社会を創り、 未来を豊かに生きていくための力を！

～教育活動の質を向上させ、学習効果の最大化を目指すカリキュラム・マネジメントの推進～

本章の概略

- 「カリキュラム・マネジメント」という言葉が、学校で語られることはありますか。変化の激しい社会を生き抜く子供たちには、社会の様々な課題や問題に、いろいろな知識や技能を使って解決し、納得できる答えや妥当な答えを見つける力などが、ますます大切になります。そのためにも、学校全体で学校教育を通じてよりよい地域社会を創るという目標を共有することが大切になってきます。
- カリキュラム・マネジメントの取組により、一人一人の子供たちが、目の前の学びを通して、自らの学びをマネジメントし、『学ぶ意味』を問いながら、『能動的に学び続ける力』を身に付けていく」という、「熊本の学び」の理念を実現することが期待されます。
- 本章では「つなぐ」をキーワードに、カリキュラム・マネジメントを推進するため、改善・充実の好循環を生み出す「PDCAサイクル」をベースに、次に示す3つの重点について、各学校で取り組む具体例を含め説明します。

重点1 全ての教職員が連携・協働し、目指す子供たちの姿を思い描きましょう。

重点2 目指す子供の姿を五者で共有しましょう。

重点3 教育活動を定期的に振り返り、更なる充実につなげましょう。

まずは、カリキュラム・マネジメントについて整理しましょう

Q1 カリキュラム・マネジメントとは何ですか？

カリキュラム・マネジメントの3つの側面である、

- ①教科等横断的な視点での教育内容等の組み立て
- ②教育課程の評価・改善
- ③人的・物的な体制の確保

を通して各学校の教育活動の質の向上を図っていく営みです。

次に、育成を目指す資質・能力について整理しましょう

Q 5 それぞれの学校で重点的に育成を目指す資質・能力とはどのようなものが考えられますか？

例えば、国語力、英語力などのように、教科等の枠組みを踏まえながら育成を目指す資質・能力の他に、教科等横断的に育成を目指すものとしては次のような資質・能力があります。

■ 学習の基盤となる資質・能力

- ・「言語能力」「情報活用能力（情報モラルを含む。）」「問題発見・解決能力」等

■ 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力

- ・「健康・安全・食に関する力」「新たな価値を生み出す豊かな創造性」「地域や社会における産業の役割を理解し地域創生等に生かす力」「自然環境や資源の有限性等の中で持続可能な社会をつくる力」「豊かなスポーツライフを実現する力」等

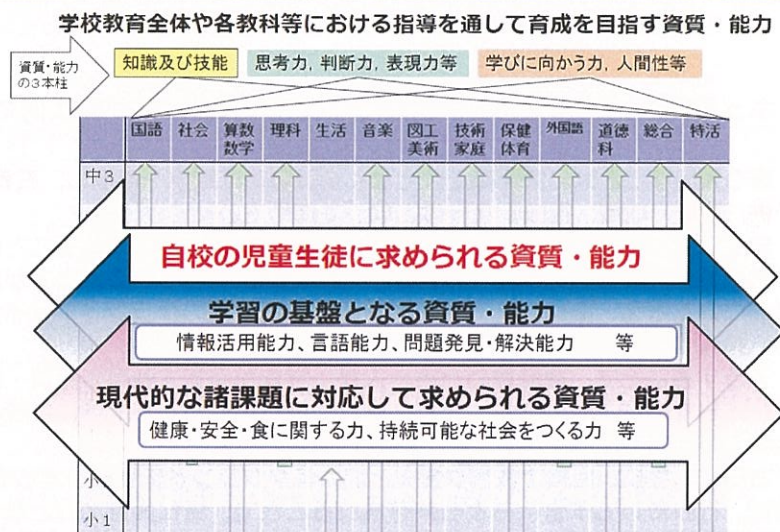
また、次のような資質・能力を設定している学校もあります。

- ・「責任感（与えられた仕事を最後までやり遂げることができる）」「学習意欲（自分で計画を立てて家庭学習に取り組むことができる）」「地域貢献の精神」「思いやりやさしさ」「自分をコントロールする能力」「多様な集団の中で協働できる能力」「郷土への愛着と世界へ目を向ける国際感覚」等

各学校では、子供たちの課題や地域の実態等を踏まえ、自校の子供たちに育成を目指す資質・能力を設定してください。

Q 6 なぜ、教科等横断的な資質・能力の育成が重要視されているのですか？

- 「資質・能力の育成」について、図に表してみると、次のようなイメージです。



- ・ 縦向きの矢印は、「各教科ならではの」教科の本質に迫る学習を通して各教科等で育まれる資質・能力。
- ・ 横向きの矢印は、一教科に限定せず様々な教科・領域等で総合的に育成していく汎用的な資質・能力。
- 急激な社会の変化に対応できる、このような汎用的な資質・能力は、一教科で限定的に育まれるものではないことから、改めて教科等横断的な視点で教育課程全体を見渡して育てていくことが重要となっています。

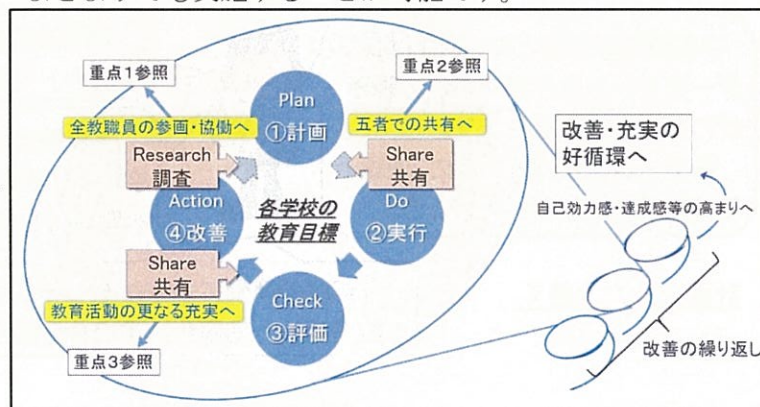
重点1 全ての教職員が連携・協働し、目指す子供たちの姿を思い描きましょう

- 校長が経営の責任者として、「この学校を〇〇のようにしたい」「こんな子供たちを育てたい」という情熱ある思いが示される中、全教職員で、未来のことを思い描くことは、楽しいものです。自校の子供たちを目の前にして、これからの社会を生きていくために大切にしていかなければいけないことは何なのか、考えることはわくわくするはずです。
- 一方で、「育成を目指す資質・能力」は何なのか、その育成のためにはどのような手立てを講じるのか、などを明確にした学校の「グランドデザイン」の作成になると、イメージがもちにくく、自校の学校教育目標や計画を設定する作業がとても大変だと感じるかもしれません。
- そこで、現在、各学校で設定されているPDCAサイクルを整理してみましょう。このことは、教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現につながる作業となります。
- 改善・充実の好循環を生み出すためには、一つ一つの取組や資源、関係者をつなぐことから始めることで、取組や役割などの関係性が分かってきます。その過程で、教育活動に重なりがあったり、不足があったり、選択が必要であったりすることが明らかになります。

- 【つなぐ例】
- 学校の実態とつながりのある計画を立てる。
 - 学校の今までの取組と、これからの計画及び取組をつなぐ。
 - 資質・能力を育むために、教科等横断的な視点で、単元と単元をつなぐ。
 - 学校教育目標や学校経営方針などを共有し、五者がつながりを持つ。
 - 教育内容と、地域の人的資源や物的資源をつなぐ。
 - 幼・保等、小、中、高の各学校段階が連携し、それぞれの教育をつなぐ。
 - 実践の成果と課題を評価し、次の実践や改善につなぐ。

- その一つ一つを整理し、意図的・計画的に再構築することで、効率化・重点化が図られ、教職員や子供たちの自己効力感や達成感が得られることにつながります。その過程を繰り返すことで、改善・充実の好循環を生み出されます。これが、改善・充実の好循環を生み出す「PDCAサイクル」(図1)です。なお、このサイクルは年間だけでなく、単元などのまとまりでも実施することが可能です。

図1 改善・充実の好循環を生み出す「PDCAサイクル」



- この図中でのポイントは3点あります。
 - ・ 1つ目は、「計画（P）」の立案です。計画立案前の「調査（R）」も含め、学校総体として全教職員が参画・協働して取り組むこと。
 - ・ 2つ目は、「実行（D）」前の、計画の「共有（S）」です。計画を実行に移すためには、何を指すのか、何をするのか共有すること。
 - ・ 3つ目は、「評価（C）」です。改善・充実の好循環を生み出すためには、実施状況や結果の適切な評価を行うこと。
- 本取組の重点1で、図中の調査から計画の箇所を、重点2で、計画から実行の間の共有に関する箇所を、重点3で、評価から改善における共有の箇所を示していきます。さあ、熊本の未来の創り手となる子供たちに向けての扉をひらきましょう。

（1）目標や計画を設定する上でのポイント

- 何のために作成するのか、目的を全教職員が共有する。
- 全教職員で意見を出し合う場や時間を確保する。
- ワークショップ等、全教職員が意見を出し合える方法を工夫する。
- 子供、家庭、地域の実態や願い及び行政の方針等を踏まえる。

（2）目標や計画設定の手順

○調査（R）・・・学校、子供、地域等の実態把握及び分析

手順① 次年度の4月からカリキュラム・マネジメントがスタートできるように、年度内に実態把握及び分析を行い、計画（P）を立てる。

【収集する情報の例】

- ・ 子供たちの姿や学校、家庭、地域の願い（全国学力・学習状況調査や熊本県学力・学習状況調査の結果、児童生徒や保護者へのアンケート、学校評価、教育活動の反省等）
- ・ 積み重ねられた教育実践（先生方のアイデア、学校文化、児童生徒会の活動、校内研修の取組等）
- ・ 学校、家庭、地域等の人的、物的資源の実情
- ・ 地域における学校間の情報共有（目指す姿や課題等）
- ・ 前年度に整理された成果や課題を踏まえた次年度の方向や方策

学校評価等をもとに、例えばリーダーチャートを作成すると、課題がわかりやすくなります。
各チーム(〇〇部)ごとに、課題とその要因を出し合しましょう。



情報を収集したら、学校の「強み」「弱み」を整理しましょう。

学校教育の目的や目標に照らして、学校や子供たちが直面している課題を明確にします。

計画（P）へ続く

次年度の準備に余裕がもてるように、意図的・計画的に再構築し、効率化・重点化を図りましょう。

○計画（P）・・・学校教育目標等の策定及び教育課程の作成

手順①五者で共有できる明確な学校教育目標を設定



五者で共有できるような分かりやすい言葉で示しましょう。また、目指す児童生徒像を具体的に示すことで、子供も理解しやすい達成したいと思える目標につながります。

手順②目標達成のために重点的に育成を目指す資質・能力を設定

【各学校の設定例】

多様な集団で協働できる力、未来を予測できる力、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力、健康・安全・食に関する力、論理的思考力、創造性、共感できる力、考えて行動できる力、やり抜く力、自立性（自律性）、社会性（コミュニケーション能力）等

目指す児童生徒像や学校の教育目標の実現につながる資質・能力を考えて設定する。

重点的に育成を目指す資質・能力の設定の例

学校教育目標

重点的に育成を目指す資質・能力

- 例 ○伝え合う力(相手の思いを受けて、自分の考えを伝えることができる力)
- 段取り力(課題解決に向けて、必要な条件を考え、遂行に向けて計画できる力)

総合的な学習の時間の目標

各学校において定める総合的な学習の時間の目標

学校教育目標と総合的な学習の時間のつながりを検討する。

具体化した文章で示し、共有しやすい表現にする。

児童生徒の実態の共有、分析

学校評価や学力・学習状況調査等から把握した実態から、児童生徒に育成すべき資質・能力を設定する。

目指す児童生徒の姿には、どのような資質・能力が必要ですか？

児童会や生徒会とも話し合う機会を設けましょう。



ワークショップ等の機会を設けて、教職員同士で、重点的に育成を目指す資質・能力の明確化を図りましょう。

手順③達成に向けた学校経営の全体構想図(グランドデザイン)を作成 ※校長のリーダーシップの下、全教職員が関わる

手順④手順②で設定した資質・能力を育成し、学校教育目標を達成できるように教科等横断的な視点で教育課程を編成

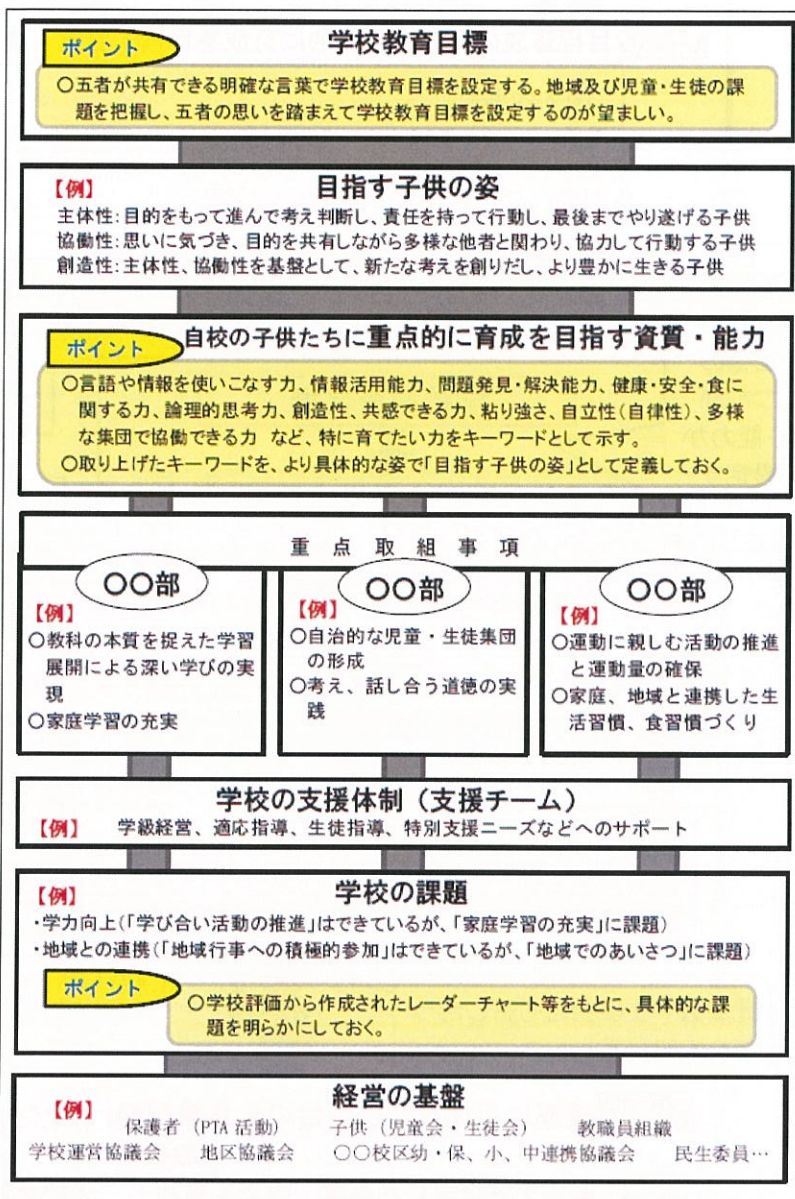
○実行（D）・・・目標達成に向けた教育課程の実施

重点3（2）へ

【グランドデザインのイメージ例】



学校教育目標と重点的に育成を目指す資質・能力、その具体として目指す子供の姿が繋がっていることが大切です。
学校教育目標が知・徳・体のみで示され、つながりが分かりにくくなっていませんか。



家庭、子供と学校の組織や取組のつながりを示すことで、目標達成に向けて連携した取組が推進されます。



学校教育目標と目指す子供の姿が、重点取組事項とつながると、教科等横断的な視点が持て、意識した実践につながり、一年間の育ちが分かりやすく、検証や改善に向けた工夫もできるようになります。

【ランドデザインの参考例】 水俣市立水俣第一小学校

水俣市立水俣第一小学校 グランドデザイン

校訓： 虔 賢 健 「 つつしみ かしこく すこやかに 」

学校教育目標

夢を持って主体的に学ぶ、心豊かでたくましい児童の育成

めざす学校像

- 子どもが喜んで登校し、楽しく学ぶ学校
- 一人一人を大切に、優しい中にも厳しさのある学校
- 明るくあたたかさが響きあい、花いっぱい、緑豊か整備された学校
- 思いやりと信頼に満ち、活気に溢れ、常に前進する学校
- 地域の賑いに加え、地域とともにある学校

めざす児童像

- 探究心に溢れ、主体的に学習する子ども
- 思いやりと感謝の気持ちを持って命を大切にす子ども
- 人との関わりを大切に、進んで明るくあたたか・感事をする子ども
- 元気に遊び、進んでからだを動かす子ども

めざす教師像

- 一人一人を真実に愛つめ、子どもに寄り添い、思いやりの可なり性を伸ばす教師
- 教育愛と誠実さを持ち、子ども・保護者・地域の信頼に応える教師
- 使命感と情熱を持ち、子どもに力をつける教師
- 研修に参画し、豊かな教養と指導力のある教師

一 小 の 学 び

教育指導に係る重点努力目標

(1)知識・技能に関わる事項	(2)思考力・判断力・表現力に関わる事項	(3)学びに向かう力・人間性等に関わる事項
①基本的学習習慣の定着 ②基本的生活習慣の定着 ③芦北管内統一事項の徹底 ④新体カテストの課題改善 ⑤栄養教諭を活用した「食に関する指導」の実践	①子供に着実に力をつける授業構想力の向上 ②芦北管内統一事項の習熟	①心揺さぶる道徳授業の展開 ②互いに仲の良い学級づくりの推進

読書活動の推進

重点的に取り組む身に付けさせたい資質・能力

学習指導要領に基づき、知徳体にあたる本校の課題から、本校児童に「育成すべき資質・能力」を設定し、国語科を軸とした教科等横断的な学習を柱として身に付けさせることを目指す。



「粘り強く学ぶ力」

児童

「段取りをつける力」

「問える力」

「段取りをつける力」

課題解決のために、自ら考え、計画的に調べ、判断し、伝え合って解決していく力を付ける。

「粘り強く学ぶ力」

できないことができるようになるために、基礎的・基本的なことを粘り強く学び、身に付けていく力を付ける。

「問える力」

学びや態度について更に深め向上するために、習題とともに問い、そして自らに問う力を付ける。

結果分析・評価

調査研究・実践検証部会を中心に、質問紙の作成・実施、調査結果の分析等を行う。

改善・充実の好循環を生み出すカリキュラム・マネジメント



人材等の活用

諸活動実践部会を中心に、PTAや学校応援団等を生かした教育活動を検討し行う。

国語科を軸とした教科等横断的な取組による授業づくり

授業実践部会を中心に、国語科を軸とした教科等横断的な学習年間計画の作成、及び研究授業による検証を行い、授業改善を図る。

保護者

地域・行政



身に付けさせたい資質・能力が家庭、地域と共有しやすい表現で示されています。同時に、教職員が教科等横断的な視点で資質・能力を育成できるように具体的な文章で補足されています。

令和元年度(2019年度) 益城町立益城中学校 グランドデザイン 《震災後だからこそ、「誇り」と「輝き」を！》

めぐもりと厳しさを持って、「自分が好き」と思える生徒を育てる 「誇り」を持たせれば生徒は育つ！ 「輝き」を持たせれば生徒は成長する！

学校教育目標
自分に誇りをもち、自ら輝く生徒の育成

重点目標
相手意識を持って、生徒が自分の言葉で語る授業をつくる

めざす教職員像 楽しい職員集団！
 使命感に溢れ、自己研鑽に励む教職員
 生徒一人一人を大切にしている教職員
 人間性豊かで情熱ある教職員

めざす学校像 生徒の姿で結集を！
 愛情と信頼のある学校 規律と活気のある学校 自信と誇りのある学校

1 生徒指導の充実
 2 学力の向上
 基本的な生活習慣の育成、学校・家庭・地域の積極的な連携
 基本的学習態度の育成、授業力の向上

めざす生徒の資質・能力 自分に誇りをもち、自ら輝く生徒！
 自らの気づきで行動できる生徒………【**主体性**】
 周囲の気持ちを考えることのできる生徒………【**共感性**】
 やり遂げることで本物を目指す生徒………【**自立心**】

益城中三綱領
 文化創造
 自主学習
 勤労実践

三つの柱

育てる結果として、目に見える成果を！ 我々は、授業力(徹底的な生徒指導)が全て！ 当たり前のことを覚める！ 生徒と一緒にできることを覚す！ 全職員が同じ方向性でメッセージを！

特別活動部
 1 よりよい学校生活をつくらうとする自主的・実践的部活動を専ら学校活動
 2 自発的・自治的活動を通して、主体的に生きる能力を専ら生徒活動
 3 学年・学校への所属感をもたせ、主体的に協力して実践しようとする態度を専ら学校行事

Check項目
 委員会や部の活動に専ら取り組んでいる…60%
 部活の専ら目標をもっている…70%
 無所属者をつかりと行っている…96%

学力向上部
 1 対話的な学びを生み出す人間関係づくり
 2 主体的・対話的で深い学びを目指した授業実践
 3 主体的な学びを生み出す家庭学習の習慣化
 4 授業中に、一定の時間を生徒に差し出す、「学びの主体性を創り出すタイム」の活用

Check項目
 果学力調査において、第1・2学年で県平均を上回る割合の教…70%以上
 相手意識を持って、自分の言葉で発表している…70%

生活向上部
 1 あらゆる不合理を見抜き、解決をめざす態度を育成する人権教育の推進
 2 道徳的実践力を育成する道徳教育
 3 専門機関と連携した組織的・継続的な問題行動及び不登校対策
 4 地震後の環境の変化に対応させる見守りと効果的なカウンセリングの計画的な実施

Check項目
 不登校生徒数：昨年度より減
 いじめの積極的認知と解消…月2件以上

事務部
 1 正確・迅速な事務処理と計画的・効果的な予算執行
 2 仮設校舎の維持整備と旧校舍解体及び新校舎建築期間の対策

Check項目
 校内の環境は整備されている…85%
 明るく開かれた窓口である…学校運営協議会における協議で評価

生徒と向き合う時間の確保
 1 働き方に適する教員員の意識改革
 2 部活動の充実し(日課の変更、水曜日をノー部活動デーとして設定

コミュニケーション
 1 益城中学校区非行防止ネットワークを活用して学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールへ移行
 2 毎月10日に「学校に行こうデー」を実施し、校長、民生児童委員等の情報交換の場を設け、ともに生徒を育成
 3 P.T.A.との連携及びボランティアの活用



身に付けさせたい資質・能力が、「～生徒」といったような目指す姿として示されています。また、各部による取組に加え、評価すべきチェック項目が客観的に把握できる内容で設定されています。

重点2 目指す子供の姿を五者で共有しましょう

- 「子供たちにどのような力を付けるのか」といった資質・能力を踏まえた学校教育目標や計画を設定すれば、次は、どのように共有していくかということが大切なポイントになります。教育活動の質の向上を図るために、学校、子供、家庭、地域、行政がつながり、連携・協働するチームとしての取組が求められています。そのために、まずは、学校経営の方針やグランドデザイン等を教職員間で共通理解し、子供、保護者及び地域の方にも繰り返し伝え、共有を図っていきましょう。

(1) 共有する上でのポイント

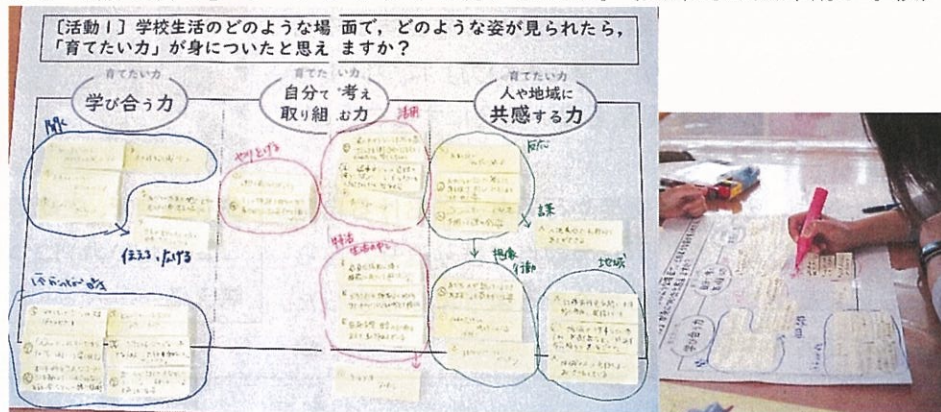
- 誰もが学校の目指す教育を具体的にイメージできる学校教育目標になるよう、簡潔で分かりやすい表現を用いる。
- 「学校教育目標を実現した子供の姿」を具体化して、五者で共有する。
- 五者のそれぞれと共有するための時間や場を設定する。
(懇談会、ホームページ、学校運営協議会等)
- 学校内外で行われる行事等の際は、目指す子供像を共有するための準備や体制を工夫する。

(2) 学校・子供・家庭・地域・行政をつなぎ、共有するために

- 「学校教育目標を実現した児童生徒の姿は?」「その姿を実現するためには?」等について年度当初にワークショップ等、話し合う場を作り、それぞれの教職員が学校教育目標の実現に向けたイメージを具体化して共有します。そのような取組を通して、一人一人の教職員が、学校教育目標の実現を「自分ごと」として捉え、主体的に学校づくりに参画することにつながります。
- ワークショップ等は年度当初、あるいは目的に応じて、長期休業日に行ったり、年度末に行ったりしましょう。

【教職員間の共有例】～「学校教育目標について話し合う」ワークショップ～

教職員間で学校の目指す教育を共有するために「学校教育目標や育てたい力について話し合う」ワークショップを行いました。(大津町立大津南小学校)

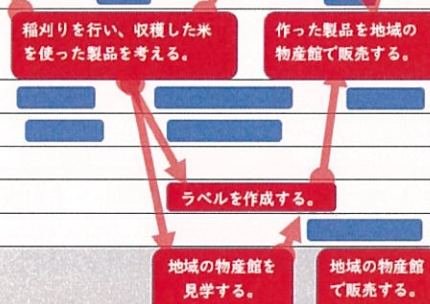


- それぞれの教職員が、共有した「姿」や「力」を踏まえた実践を行うことで、それぞれの授業や学級、校務分掌における取組と、学校教育目標の実現とのつながりをイメージできるようになります。
- また、教科等横断的な視点による教育課程の編成は、「育成を目指す資質・能力」の観点から工夫する必要がある、そのことを意識することで、より効果的な編成ができるようになります。

単元配列表

総合的な学習の時間 の目標	育成を目指す資質・能力											
	① 考動カ						② 共感カ					
月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語	[Blue Bar]						[Blue Bar]					
算数	[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]	
社会	[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]	
理科	[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]	
総合的な学習の時間	[Blue Bar]						[Blue Bar]					
特別活動	[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]	
道徳	[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]	
音楽	[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]	
図画工作	[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]	
体育	[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]	
地域との関わり	[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]		[Blue Bar]	

「育成を目指す資質・能力」をイメージして、単元と単元のつながりを考えることがポイントです。



単元配列表の作成例について、くわしくはP59～をご覧ください。

- 育成を目指す資質・能力を児童生徒と共有することで、より大きな効果を上げることができます。例えば、「共感カ」を「思いやり」という分かりやすい言葉で言い換えたり、子供が「共感カ」を働かせたときに、その姿を取り上げて「共感カが高まっているね」と声をかけたりすれば、低学年の児童とも共有することができます。

【児童生徒との共有例】 ～生徒会の活動と共に～

先生が育てたい力を生徒がどのように捉えているのか、生徒会がアンケートを実施してその結果を分析しました。生徒集会でその結果を発表して生徒同士で話し合うことで、生徒自身が「育てたい力」について考え、「自分ごと」として捉える良い機会にすることができました。



生徒集会で、生徒自身が「育てたい力」について考える

生徒たちは、その後、授業や行事などにおける自分たちの学びを「育てたい力」の観点で振り返り、自ら学びの質を高めていくことができるようになりました。
(和水町立菊水中学校)

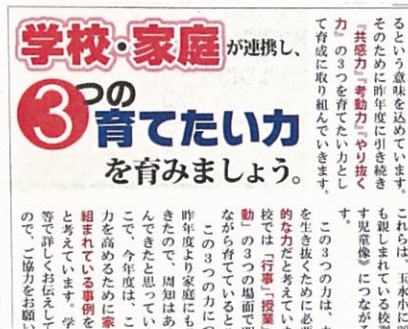
- また、PTA総会や学校運営協議会など学校が保護者や地域の方に話す機会に、「育成を目指す資質・能力」についての話題を分かりやすく、繰り返し取り上げていくことで、子供たちだけでなく、保護者や地域の方とも目指す子供の姿を共有できるようになります。
- 家庭や地域に向けて発信する際も、「育てたい力」のような分かりやすいフレーズを用いながら、繰り返し発信することで、学校が目指す教育について保護者や地域が理解を深め、それぞれの立場で実践をすることができ、目標や目的が明確な連携・協働した取組につなげることができます。

【保護者・地域との共有例】

～通信等を通して発信～

年度当初のPTA総会や学校運営協議会等において、グランドデザインを「育てたい力」に焦点化して具体的に説明することで、保護者や地域に分かりやすく紹介しています。

(玉名市立玉水小学校)



通信の一部を使って発信

PTA新聞や学校便り、ホームページ等において「育てたい力」をキーワードとして、繰り返し発信することで、年間を通した共通の話題にしています。(玉名市立横島小学校)

3つの育てたい力

投稿日時: 10/30 承認者: カテゴリ:

10月30日(水) 本校では、3つの育てたい力を定めて育成に取り組んでいます。「共感力」「考動力」「やり抜く力」の3つです。今日紹介するのは、1年生の後期の目標設定シートです。1年生なりに3つの育てたい力を目標に定めて取り組んでくれています。



HPを使って発信

- 地域の方と合同で行う活動についても、「育てたい力」を地域の方に事前に説明し、目指す子供の姿を共有しながら取り組むことで、資質・能力が育まれる活動にすることができます。

【保護者・地域との共有例】

～地域の活動にボランティアとして参加～

地域で行われているマラソン大会で、地域の行事に貢献するためにボランティア活動を行っています。

本年度は、ボランティア活動を通して「共感力」を育てることを児童や地域の方と共有して活動を行うことで、学校教育目標の実現につながる、さらに充実した活動にすることを目指しています。

(玉名市立横島小学校)



地域の行事に参加

重点3 教育活動を定期的に振り返り、更なる充実につなげましょう

- 子供たちの学びの姿や教育活動の実施状況を振り返り、改善・充実を図りながら教育活動や学校運営に取り組むことで、教育活動の質が高まっていきます。教育活動や学校運営の改善・充実を図るためには、学校評価をカリキュラム・マネジメントと関連付けながら複数回実施する必要があります。そのためには、評価の観点に教育課程に関する項目を位置付けたり、改善を見通して評価を定期的実施したりするなど教育活動と学校評価が繋がっていることが大切です。

(1) 学校評価を実施する上でのポイント

～評価項目～

評価項目に、教育課程・学習指導に係る項目、教育課程を効果的に実施するための人的又は物的な体制の確保の状況、PDCAサイクルの実施状況など、カリキュラム・マネジメントの推進状況を加えます。評価項目は、学校経営の構想や教育課程の編成方針と整合性・関連性を図りましょう。また、評価項目については、「学校評価ガイドライン」を参考に作成してもよいでしょう。

「学校評価ガイドライン[平成28年改訂]」(文部科学省)

- ・具体的にどのような評価項目・指標等を設定するかは各学校が判断
- ・評価項目等の設定について、検討する際の視点が12分野にわたり例示
- ・各学校は、例示された項目を網羅的に取り入れるのではなく、その重点目標を達成するために必要な項目・指標等を精選して設定

～評価の実施時期～

評価結果に基づき学校運営の改善を図るため必要な措置を講ずることができるように、PDCAサイクルの中に、複数回の評価を位置付けましょう。評価は定期的実施し、結果等から教育目標の実現状況や教育課程の実施状況を確認、分析して課題となる事項を見だし、改善方針を立案して実施していくことが求められます。また、次年度の計画を作成する時期に実施し、評価の結果を次年度の取組に反映することも大切です。行事後の評価、日常の教育活動の評価及び学力調査後の評価など、学校の実態に応じて工夫しましょう。

～評価の対象者～

学校、子供、家庭、地域、行政(五者)が、学校と協働して子供の教育に取り組む意識を高めるために、それぞれに応じた内容でアンケート等を実施することも効果的です。

～評価の公表と改善～

授業参観、説明会、学校便り、学年便り、学級便り、ホームページ等を活用し、日常のかつ積極的に情報提供しましょう。また、次への改善はどのようにするのか、計画を立て実施することも重要です。

(2) 学校評価の流れ (改善・充実のために)

重点1 (2) より

○実行 (D)



計画を実行に移すためには、何をを目指すのか、何をするのかを共有 (S) することが大切です。評価後に、改善案を検討する際も、結果を共有し、具体的な改善案へつなげていきます。

○評価 (C) …… 実態に応じた学校評価

手順① 評価時期における評価の実施 (C)

【学校評価例】

・各教科等の授業の状況、教育課程等の状況、職場体験活動の実施状況等のアンケート、子供や保護者へのアンケート 等

○共有 (S)・改善 (A) …… 結果の共有 (公表)・次への改善

手順① 学校評価の結果の共有 (S)

【共有の場】

授業参観などの学校公開時
地区懇談会、学校運営協議会、全校集会等
各種便り (学校便り、学年便り、学級便り等)

手順② 次に向けての改善 (A) * 評価項目を含む

○調査 (R)、計画へ (P) …… 改善に向けた調査、改善された計画へ (P15 に戻る)



計画を立てる前には、調査を行的に状況を把握し実態をつかむことが大切です。把握することで、今、重点的に取り組むことが何かが明確となり、具体的な取組につなげることができます。

【評価から改善・計画につなげる例】 ～行事の直後に振り返り～

教育活動の評価 (防犯教室の例)

・悪いことをする人は顔を見られるのを嫌うため、手を出しにくくなる。(挨拶は顔を見てするから)

【直後プラン】

○全体指導や地区ごとの指導という流れがよかった。
○期日を休み前に移動したらどうかという意見もある。
△「一人にならない」という設定は無理がある。「むしろ一人になった時」の対応策を考えたほうがいい。「110番の家」の周知等。

行事の直後に振り返りを行うことでより具体的な改善・計画へ
〈例〉直後プランの実施と記録

【学校教育目標につなげる例】
 ～行事計画作成時の目的に学校教育目標の項目を記入～

令和〇年度 第1回 〇〇教室実施計画書

令和〇年〇月〇日

〇〇教育担当

1 目的

- (1) 児童の健康への関心・意欲を高め、心身ともに健やかな児童を育成するために、健康に関する情報を提供し、よりよい生活習慣の定着を図る。**(考動力)**
- (2) 各種委員会や児童による発表の機会を設定し、発信する側にも保健の知識を深く理解させる。また、受け手側には、日常生活との関連を意識させることで、より効果を高める。**(共感力)**

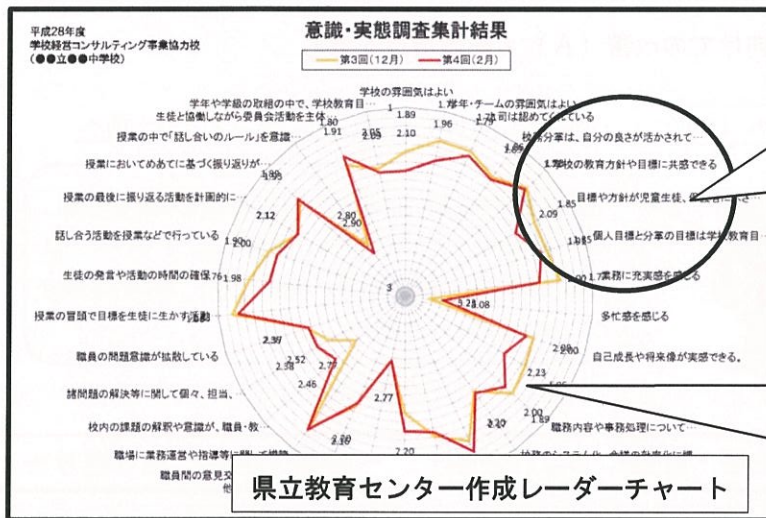
学校教育目標と重点的に育成を目指す資質・能力を常に意識した取組へ
 (例)「共感力」といったように目指す資質・能力につながる語句の使用

【評価から改善・計画につなげる例】 ～レーダーチャートを利用～

12月と2月に学校評価(アンケート)を行ったもの(C)を比較

→職員会議等で共有(S)

→項目毎に見直し、改善(A)と次の計画(P)につなげることが大事



関連する項目ごとに振り返りを行うことでより具体的な改善・計画へつながります。

複数回の記録を重ねることで、項目の変化が可視化されて見直しのヒントにつながります。

【項目例】	質問例	【項目例】	質問例
職場環境	○学年・チームの雰囲気はよい ○学校の教育方針や目標に共感できる 等	授業	○授業の最後に振り返る活動を計画的に取り入れている ○生徒の発言や活動の時間を確保している 等
自律性	○業務に充実感を感じる ○自己成長や将来像が実感できる 等	学校独自	○重点取組事項 ○共通取組事項 等
協業性	○課題に対してチームで取り組むことができる ○校内研修において学校総体で動いている雰囲気がある 等		

3

熊本の子供を、「学びの主体」として育てるために！

～子供が問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める授業改善の推進～

本章の概略

- 「熊本の学び」では、「問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める子供」を実現する授業づくりを目指します。そのためには、子供の学ぶ意欲を高め、基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けることを徹底し、「主体的な学び」の基盤づくりを進めていくことが大切です。
- そこで大切になるのが、視点の転換です。これまでの授業は、主に教師の側、教える視点で構成してきました。「熊本の学び」では、子供の「学び」に視点を転換し、「子供たちの学びの側」から考え、子供たち一人一人の「学び」を十分に理解することを大切にしています。
- 教師の視点から示していたこれまでの授業を子供（学習者）の視点で再構築し、子供の学びの姿を分かりやすいフレーズで示しました。子供ともイメージの共有化を図ることができるように、「熊本の学び」における授業づくりのポイントを以下のように整理しました。

「熊本の学び」における授業づくりのポイント

- 子供の『わくわく』（知的好奇心や興味・関心等）が連続し、『学びを生かそう』とする姿が生まれる単元デザインの工夫
- 子供の『なぜ』『おそらく』（疑問や予想等）が生まれる導入の工夫
- 子供の『やってみよう』『なるほど』『きっと』（挑戦や納得等）が生まれる展開の工夫
- 子供の『分かった』『できた』『もっとやってみよう』（実感や達成感、更なる意欲等）が生まれる終末の工夫

- 本章では、本県が目指す子供たちの学びの姿の実現に向け、単元や題材（以下、「単元」という）など内容や時間のまとまりを見通した授業構想の在り方や、見方・考え方を働かせて課題解決を図る学習活動の在り方などを盛り込んだ学習構想案、探究的な学びを展開する「総合的な学習の時間」や能動的に学び続ける力の土台となる「キャリア・パスポート」、安心と信頼を基盤とした高め合う学級づくりについて示しています。

重点1 子供の『わくわく』が連続し、『分かった』『できた』『もっとやってみよう』が生まれる授業を目指しましょう

- ◆ポイント1
子供の『わくわく』（知的好奇心や興味・関心等）が連続し、『学びを生かそう』とする姿が生まれる単元デザインの工夫
- ◆ポイント2
子供の『なぜ』『おそらく』（疑問や予想等）が生まれる導入の工夫
- ◆ポイント3
子供の『やってみよう』『なるほど』『きっと』（挑戦や納得等）が生まれる展開の工夫
- ◆ポイント4
子供の『分かった』『できた』『もっとやってみよう』（実感や達成感、更なる意欲等）が生まれる終末の工夫
- ★ポイント5
主体的・対話的で深い学びへとつながるICTの効果的な活用

重点2 「単元のゴールの姿」に向けて、「単元・題材のまとめ」で授業を構想しましょう【学習構想案】

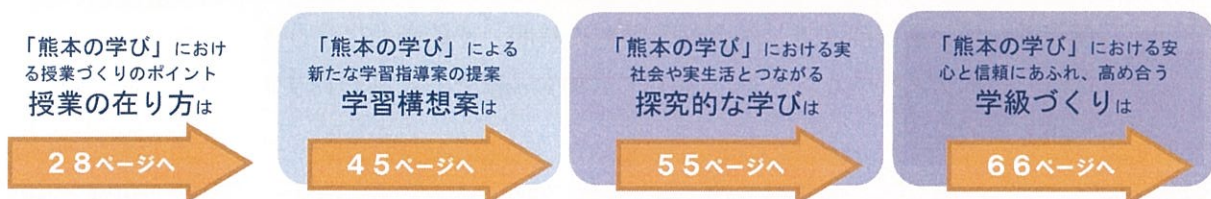
- ◆「学習構想案」を作成するに当たっての作成要領及び留意事項
- ◆「資質・能力」を育成する学習構想案の具体例（例：小学校国語科）

重点3 自分なりの問いを立て、探り、新たな問いへとつながる「探究的な学び」を展開しましょう

- ◆総合的な学習の時間の全体計画、年間指導計画、単元計画作成について
- ◆夢の実現に向けて～主体的に学びに向かう力を育むキャリア教育の充実～

重点4 安心と信頼にあふれ、高め合う学級をつくりましょう

- ◆本重点の概要
- ◆学級づくりで大切にしたいこと（熊本の教師の心がけ10か条）



重点1 子供の『わくわく』が連続し、『分かった』『できた』『もっとやってみよう』が生まれる授業を目指しましょう

ポイント1

子供の『わくわく』（知的好奇心や興味・関心等）が連続し、『学びを生かそう』とする姿が生まれる単元デザインの工夫

1 単元デザインの必要性

- 学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、単元など内容や時間のまとまりを見通して授業を構想することが求められています。
- 「主体的・対話的で深い学び」は、必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるのではなく、単元など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し、振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、子供たちが考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考えて、授業を構想していくことが大切です。
- そこで、「熊本の学び」では、子供たちに育成を目指す資質・能力を確実に育むことができるよう、単元を通して学んだ後の姿（以下、「単元のゴールの姿」という）を設定し、単元など内容や時間のまとまりを見通して授業を構想することを大切にしていきます。
- 子供たちの学びに対する知的好奇心や興味・関心等（『わくわく』）が連続し、学んだことを次の学習や実生活に生かそうとする姿が生まれるように、単元をデザインしましょう。



Before

- 校内研修等の事前・事後の研究会では、**本時の学習（展開）や教師の教え方**を中心に協議が行われている。
- 単元における子供の実態を把握し、単元の目標は設定されているが、学習活動が**目標の方向**に向かっていない。
- **指導書**に書かれている内容（指導例）だけで、指導計画を立て、毎時間の授業を展開している。



After

- 研修会では、一人一人の子供の学びの姿から、単元全体の構想や、その中での本時のあり方を検証する。
- 単元におけるゴールの姿を実現させるために必要な**学習課題や学習活動**を設定し、学習過程を構想する。
- 授業者が**学習指導要領**の内容を十分理解し、子供たちの学びに応じて、内容や時間の**まとまり**を意識した単元をデザインする。

2 育成を目指す資質・能力と単元デザインについて

- 子供たちに求められる資質・能力を確実に育むためには、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を進めていくことが重要です。そのため、単元を通してどのような子供たちの姿を目指していくのかを明確にイメージし、**単元を構想**しましょう。

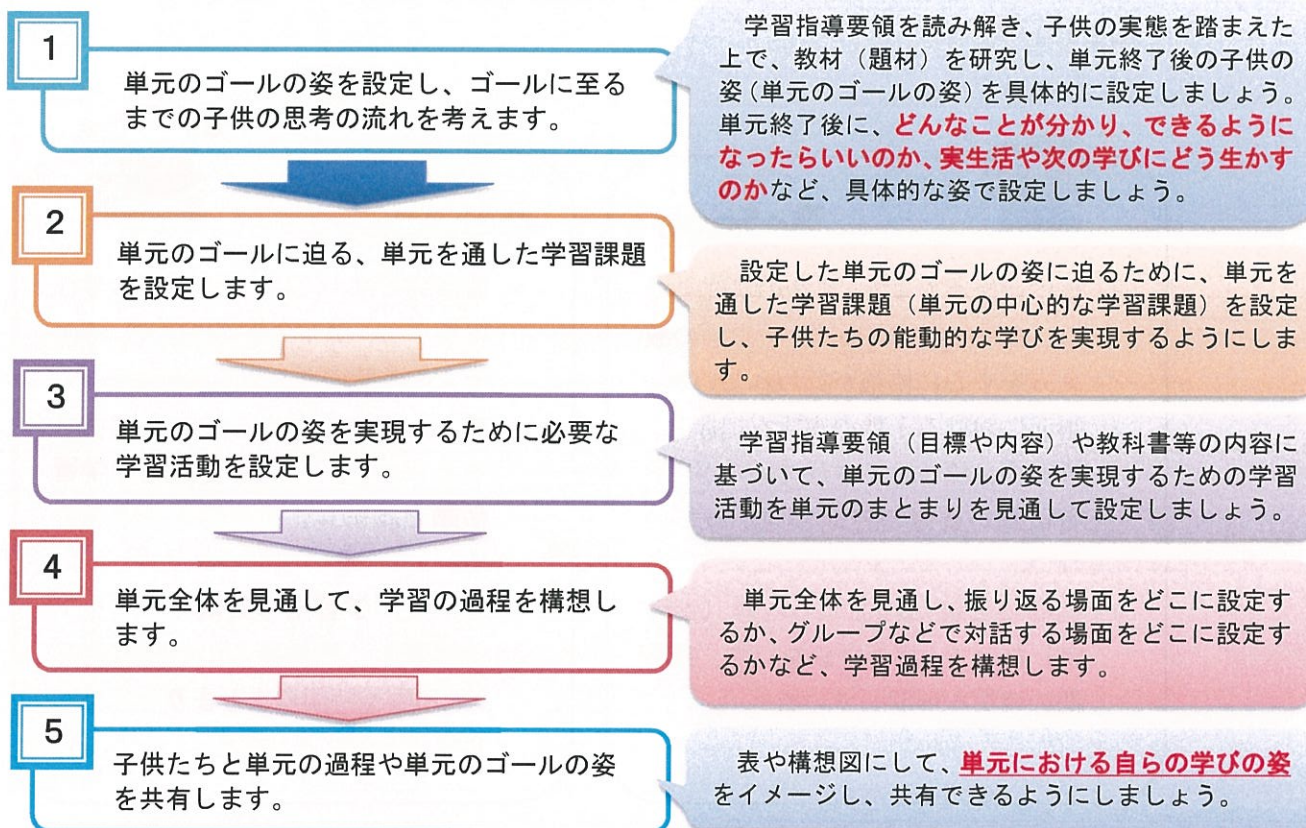
学習者の視点に立った「熊本の学び」へ

「熊本の学び」で大切にしていることは、『子供たちの学びの側』から考える」ということです。子供たちを「学びの主体」として育て、子供たちが学んだことを次の学習や自らの人生、さらには社会のために活用できるという実感を積み上げる営みです。



子供たちの能動的な学びは、教師の綿密かつ計画的な準備と質の高い指導の上に実現するものです。これまで学んだことや実生活とのつながりを問いながら知識の活用を促したり、振り返りの場面で自分や社会との関連について考えさせるなど、学習活動や言語活動の工夫も求められるでしょう。

3 単元デザインの手順及び留意事項



【手順及び留意事項】詳細版

1 単元のゴールの姿を設定し、ゴールに至るまでの子供の思考の流れを考えます。

これまで

単元の目標を設定し、目標の達成を目指してきました。



これから

単元の目標とともに、単元のゴールの姿を具体的に設定し、次の学習や実生活等に生かすことができるようにします。

【単元の目標】

学習指導要領に示された内容に基づいた学習のまとまりを通して育てる資質・能力のことです。



【単元のゴールの姿】

子供の実態を踏まえ、単元のゴールの姿を設定します。単元を通して学習し、そこで身に付けた力を次の単元等の学習や今後の実生活に生かそうとする姿をより具体的に設定し、学習を構想します。

2 単元のゴールに迫る、単元を通した学習課題を設定します。

子供が単元を通して興味・関心を持って深く考えることができるか、見方・考え方を働かせて課題解決を図ることができるかといった視点で子供たちの学びの側に立って、学習活動を方向付ける必要があります。学習課題（単元の中心的な学習課題）は、子供の資質・能力を育成するための学習活動を方向付けるものとなっているか、日常生活や社会生活との関連のあるものであるかなどについて検証し、質の高いものにしていきましょう。

3 単元のゴールの姿を実現するために必要な学習活動を設定します。

各教科の学習指導要領の目標や内容には、観点ごとに育成すべき資質・能力が示されています。各教科等の学習指導要領の解説をよく読んで学習活動を設定しましょう。

必要に応じて、当該単元だけでなく、関連する既習の学習内容について、子供たち自身がフィードバックして振り返ったり、学び直したりする学習活動を設定しましょう。

4 単元全体を見通して、学習の過程を構想します。

単元のゴールの姿を実現させるために、単元における「学習活動」を設定しましょう。その際には、子供の思考の流れを捉えて学習活動を的確に配置することが大切です。

その際、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり、学習したことをまとめたり振り返ったりする場面をどこに設定するか、単元全体の中でバランスよく組み立てることが重要です。

5 児童生徒と単元の過程や単元のゴールの姿を共有します。

単元のゴールの姿や単元デザインは、教師だけのものであっては子供の主体的な学びの姿にはつながりません。単元の導入では、単元終了後にどんなことができるようになるのかを教師と子供たちとで共有し、子供たちが自ら学習の見通しをもつことが大切です。

例えば、振り返りシート等で単元のゴールまでの過程を見通すことができると子供たちの学びが主体的になり、自らの学びを調整したり、変容を自覚したりすることができます。学ぶ意欲を引き出し、継続させ、学びの深まりをつくり出すことにつながります。

4 単元など内容や時間のまとまりを見通した単元のデザイン（例）

- 単元をデザインする上で大切にしたい項目を設定する際には、以下を参照しましょう。設定する際の留意事項や具体例を示しています。

【参照】 「学習構想案」の「1 単元構想」の前半部分を抜粋

単元の目標	※ 単元・題材における目標を観点ごとに設定します。		
	①・・・	②・・・	③・・・
単元の評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	※ 学習指導要領に示されている目標（3つの柱で整理）を基に、「内容のまとまりごとの評価規準」が設定されます。そこから、単元・題材の評価規準を設定します。学習指導要領解説を基に、観点ごとに、具体的に評価規準を設定しましょう。（国立教育政策研究所から示されている例を参照してください。）		
単元終了時の子供の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）			
<p>※ 単元で学んだ後の子供の姿を具体的に設定します。学んだことを次の学習や実生活で生かそうとする姿をイメージして設定します。</p> <p>※ 文末は「～している子供」「～しようとしている子供」等で表すことが考えられます。</p> <p>※ 各学校で重点的に育成を目指す資質・能力と関連付けて設定することも考えられます。</p>			
単元を通した学習課題（単元の中心的な学習課題）		本単元で働かせる見方・考え方	
※ ゴールの姿の実現を図るために、単元を通した学習課題（単元の中心的な学習課題など）を設定します。問いかけや呼びかけになるように表記します。		※ 学習指導要領解説に示されている、各教科等における「見方・考え方」を基に設定します。	

※研究指定校（H31～R1）である津町立室小学校及び御船町立御船中学校の研究実践の例

単元終了時の子供の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）	
国語 (小学校)	言葉に着目して物語を読み、人物像や情景描写に関する表現の工夫や変化を捉え、作品の魅力を友達やお家の人に伝えようとする子供
社会 (小学校)	販売に関わる仕事は、消費者の多様な願いをふまえて、売り上げを高めるように工夫して行われていることを理解し、買い物をするときなど、地域の消費者の一人として社会を見ようとする子供
算数 (小学校)	友達と関わり合いながら、「10とあといくつ」や10の補数の見方を基に、数を操作して計算の仕方を考えたり、日常生活から様々な加法となる問題を見出したりする子供
理科 (中学校)	電解質水溶液に電気が流れるとき、水溶液と電極付近で、どんなことが起きているのか友達に説明するとともに、金属メッキされた身の回りの製品について学んだことと関連付けて事象を捉えようとする子供
英語	人称代名詞目的格のhimやher、また既習の表現を使って、友達に自分の家族のことや好きな人・尊敬する人などのことを自信をもって紹介しようとする子供

※具体例は、随時、熊本県教育委員会のホームページに掲載しますので、参考にしてください。

5 子供たちが単元・題材における学びを見通し、振り返るための工夫

- 子供たちを「学びの主体」として育て、子供たち自身に「学んだことが、次の学習や自らの人生、社会のために役立つ」という実感を積み上げるためには、子供たちが学習を見通し、自らの学びを調整したり、自己の変容をつかんだりすることができる振り返りが重要です。
- ここでは、振り返りシートの例を示します。校内研修等で検討し、共通実践を図りましょう。

振り返りシートの例

小学校6年国語 「海のいのち」 学びシート

6年〇組〇番 名前 _____

単元のめあて

学習課題と見方・考え方

※ 単元を通した学習課題や単元で働かせる見方・考え方を書き、子供たちがいつも意識して、学習に取り組んでいくような工夫も考えられます。

学習計画	振り返りポイントの記録
① 推薦カード作成の見通しを立てる。 ② 物語のつくりや内容を確認する。	②の後に振り返って記録しよう！
① 父の人物像から太一の心情を読む。 ② 与吉いさの人物像から太一の心情を読む。 ③ 母の会話から太一の心情を読む。 ④ クエの描写から太一の心情を読む。 ⑤ 太一の表情の描写から心情の移り変わりを読む。 ⑥ あと語りの場面の効果について考える。	④の後に振り返って記録しよう！ ⑥の後に振り返って記録しよう！
① 推薦カードを完成させ、紹介し合う。 ② 学習を振り返って次へのステップを話し合う。	

単元の学びを振り返って

※ 目標とした「単元のゴールの姿」に到達できたか。何ができるようになったか、何ができなかったのか、その要因は何か、ここでの学びを何に生かせそうかなど、自らの学びを振り返って書きます。



なるほど。この学習ではこんなことができるようになったらいいのね。できそうだな。

前に解決できなかった〇〇を次は、友だちと話し合って、協力して解決してみよう。

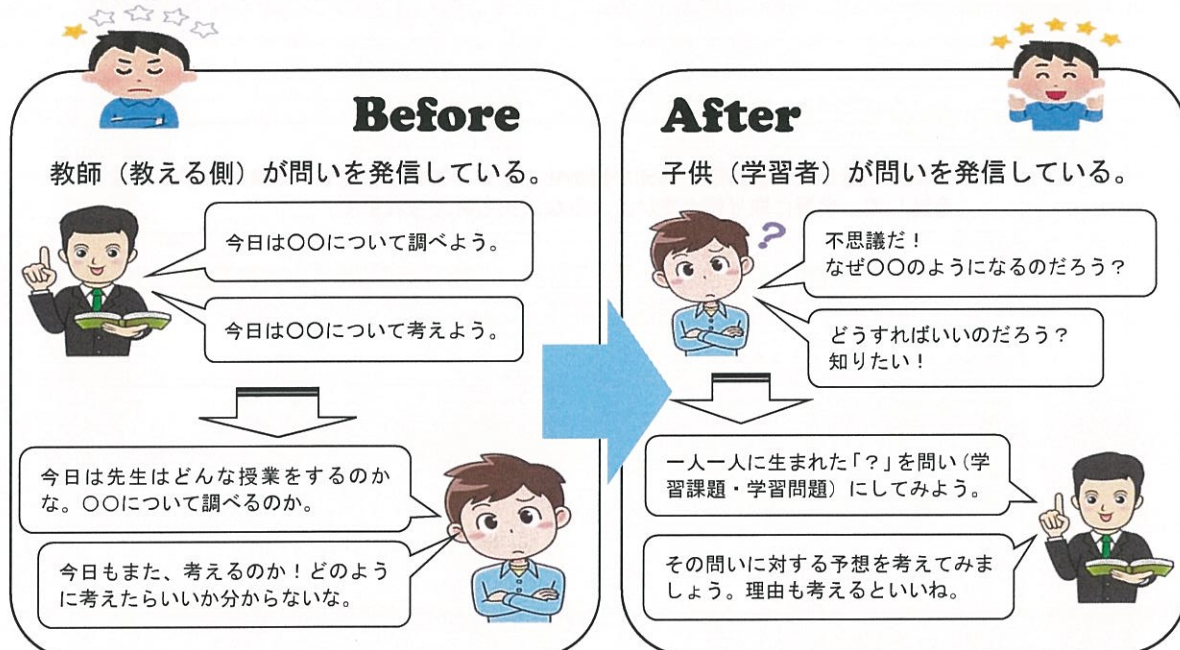


ポイント2

子供の『なぜ』『おそらく』（疑問や予想等）が生まれる導入の工夫

1 『なぜ』『おそらく』が生まれる導入の工夫について

- 主体的に学びに向かう子供たちの姿へとつなげるためには、子供が発する『なぜ』『おそらく』というつぶやきを拾い、それを生かして学習を方向付けながら問い（学習課題、学習問題）としてまとめていくことが大切です。子供の疑問や興味・関心を把握し、いかに導入で生かすことができるかが鍵となります。
- ここでは、導入場面での例を挙げていますが、子供たちが主体的に学びに向かおうとする時に大切な『なぜ』『おそらく』という課題意識は、展開の場面や終末の場面など、様々な場面で生まれます。子供たちの知的好奇心を高め、『わくわく』しながら意欲的に学びに向かわせる働きかけが大切です。



2 問いを引き出すことについて

- 子供たちが問いをもつようになるには、導入場面で子供たちの知的好奇心や興味・関心を高めることが重要です。そのためには、子供たちが『わくわく』する教材・教具等の工夫・準備と効果的な提示が必要となります。
- 子供たちが疑問を持つ教材、子供たちの驚きや発見がある教材、子供たちの矛盾や困惑、葛藤を引き出し、心をゆさぶる教材などとの出会わせ方を工夫すれば、問いが生まれ、学習が動機付けられ、『やってみよう』『調べよう』という学ぶ意欲が高まります。

3 子供から「問い」を引き出すポイント

(1) 教師自らが『わくわく』するものを

教師自らが『わくわく』するものは、学習者も『わくわく』するものです。自分が考えた手立てが『わくわく』するものか、子供の立場に立って考えたり、事前にやってみたりしましょう。

(2) 子供の『なぜ』『おそらく』が生まれる教師からの情報提供を

学習者が疑問をもったり、発見したりすることができる教材・教具等を提供することで好奇心が高まります。子供の生活体験や既習事項を基に、問いを引き出すためのきっかけとなる言葉かけや文章、図や写真、表やグラフ及びイラストや実物などの教材・教具等を作成し提示の仕方を工夫してみましょう。

(3) 答えのない問いや創造するテーマなどを

誰も答えを知らないものは、正解・不正解といった発想がないので、自由な発想を養う機会になります。また、他者と自分に問いかけ、問い直し、問い続けることで、答えなき問いを問い続け、新しい考え方や価値などを創造する力の育成にもつながります。

子供が問いをもつことにより、こんな効果が期待できます

① 学びに向かう力が高まる

教師から与えられる学習課題に取り組む、教師の発問に対して答えるという授業では、子供たちは学習課題を自分ごととして捉えられません。自分ごととして捉えていない学習課題に対しては、主体的・意欲的に取り組むことが難しくなります。

「なぜだろう」「不思議だ」「知りたい」と課題意識をもち、学習課題を自ら立てることができると、子供たちが問いを自分ごととして捉え、学びに向かう力が高まります。

② 問う力と見通す力が高まる

子供たちが、「自分に問う」「教材に問う」「他者に問う」など、問いを発する経験を積んでいくことが大切です。そうすることで子供たちは、問いに対して、すぐ解決できそうな問い、みんなと協力して解決する必要がある問いなど、学習を見通す力が高まっています。

③ 主体的に学習に取り組む態度が高まる

子供たちは、自らの学びを「何を」「どのように」「どうして」などと問うことで、現在の自分の知識を整理することができます。

また、自分は「何が知りたいのか」「なぜ知りたいのか」「知ることによってどうするのか」「知るによって何ができるのか」「知るによって何が変わるのか」といったことを考えるきっかけが生まれ、課題解決に向かって粘り強く取り組んだり、自らの学びを調整したりしようとする態度が高まります。

導入の工夫の例

単元名：「大地のつくりと変化」 小学校6年生 理科



子供たちは、同じ地層の重なり具合を考えながら、地層パズルに挑戦し、楽しく活動しながらも、地層の重なり方の規則性や断層の特徴に注目し、課題意識をもっていきます。

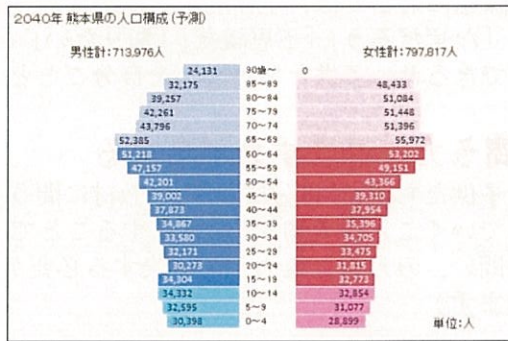
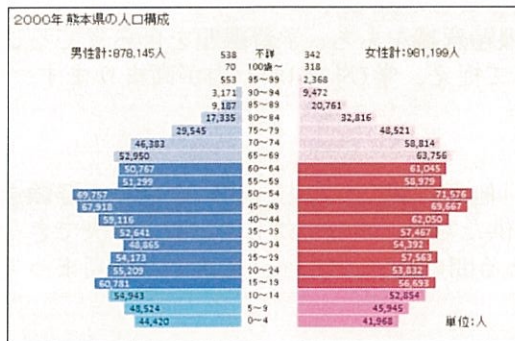
縞模様がつながるように並べるといいんじゃない？

完成したけど、縞模様がずれているところがあるぞ！どうしてかな？

単元名：「人口の特色」 中学校2年生 社会科（地理的分野）

熊本県の人口ピラミッドの変化と予測

2つの資料を提示し比較させ、驚きや疑問を引き出します。



出典：国立社会保障・人口問題研究所



昔と今の熊本県の人口ピラミッドを比べて見みると、形が大きく変わっているけど、なんでこんな形になっているのかな？

年代によって、人口が多かったり、少なかったりしているのはなぜかな？ その年には、何か起きたのかな？

ポイント3

子供の『やってみよう』『なるほど』『きっと』（挑戦や納得等）が生まれる展開の工夫

1 「展開の工夫」で目指す姿について

- 子供たちが学び合う（練り上げる）場面では、『やってみよう』『なるほど』『きっと』というつぶやきが生まれ、考えや価値観の違う他者と対話し、根拠を明確にして相手に伝える中で、納得する解を導いていくなど、子供たちが主体的に学びに向かうことが大切です。
- 学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など）の質を向上させることに主眼をおいた上で、子供たちが考える場面とグループなどで対話し、協働して問題を解決する場面をどのように組み立てるかが大切です。

子供たちに「考えを伝えたい！」「相手の考えを聞きたい！」「調べたい！」「読みたい！」「解いてみたい！」と感じさせることで、主体的に学ぶ態度を育てます。
また、教師が、子供たちに学び合う必要性をいかに感じさせるかが大切です

Before

こんな展開場面に思い当たることはありませんか。

発表してください。

私は〇〇と考えました。

同じです。私も〇〇と考えました。

導入は盛り上がっていたのに、話し合いは盛り上がりません。

もう少し、深まりがある学習にできないかなあ。

After

私は〇〇と考えました。

同じです。私も〇〇と考えました。

だれの説明と似ていますか。違うところはありますか。

友達の考えを聞いて、気付いたことはありませんか。

こんな見方・考え方もありますよ。

「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、教師による積極的なコーディネートの方法を考えてみませんか。

展開の工夫の例

主体的・対話的に学ぶために

子供たちが学ぶことに興味や関心をもち、課題解決に向けて児童生徒同士の学習活動の質を深めていく際に生まれる「やってみよう」「なるほど」「きっと」というつぶやきは、子供自身が「学びとる授業」につながります。



「どう考えますか？」（自由回答式）
「どれだと思いますか？」（選択式）

「きっと…」「たぶん…」
「こっちなかな…」
「おそらく、こうじゃないかな…」



「どう考えますか？」という拡散的な問いは、児童生徒の考えを広げさせることにつながります。
「どれだと思いますか？」と根拠をもとに自分の考えをもつ問いは、自分の考えを明確にもたせることにつながります。

やってみよう

生かす



「みんなの考えを共有しましょう。」

私の言ったこと伝わったかな？



わかるよ。こういうことだよね。

私は〇〇と考えました。なぜなら…



わかったなるほど

自分の考えを互いに伝えることで、他者の考えを知ることになり、自己の考えを広げ深めることができるようになります。

つなぐ



「似ている考えや他の考えはありますか？」

私は、花子さんと同じ考えだと思っていたけど、少し違ったよ。〇〇と考えたよ。



お互いの意見の相違点に気付く発問を行うことで、新たな考えに気付いたり、自分の考えをより根拠のあるものとして考えを深めたりすることができます。

なるほど。でも、〇〇の部分は花子さんと似ているね。ぼくは□□を使ったよ。



「今日の学習で何がわかりましたか。」
「どう生かしますか。」

今日の学習で、〇〇がわかった！

今度は、太郎さんの方法で考えてみたい。

この問題はどうなるのかな



子供たちが自ら学習を振り返る発問を行うことで、学びの価値を自覚したり、次の学びに向かう問いや課題を明らかにしたり、学習意欲を高めたりする活動ができるようになります。

きっと

伸ばす

単元・一単位時間の子供の姿



深い学びに導くために

各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、課題解決を図っていくことができるように、子供たちの思考を促し、学習が深まるようにしましょう。

教師が積極的にコーディネート（ファシリテート）

「どう考えますか？」（自由回答式）
「どれだと思いますか？」（選択式）など

☆子供たちのつぶやきが聞こえるなあ
☆自力解決のヒントを示したい

↓
「近くの友達と相談してみよう。」

「みんなの考えを教えてください。」

☆花子さんは〇〇のことを言いたいんだな
☆聞き手のみんなには伝わっているのかな？

↓
「花子さんが発表したことはどういうことでしょう。」
「近くの友達と相談してみよう。」
「花子さんが発表したことを他の言葉で説明してくれる人はいませんか。」

☆似ている考えや、よりよい考えを広げたい

↓
「花子さんの考えと似ている考えはありませんか。」
「他の考え方はありませんか。」

☆共通点を見付けてほしい

↓
「これらの考えを見て気付いたことはありませんか。」

☆新しい見方・考え方に気付いてほしい

↓
「どこに着目したり、考えたりすれば解決できましたか。」

☆次時の学習につなげたい

↓
「もし、〇〇だったら、どうなりますか。」

☆家庭学習につなげたい

↓
「似たような問題を作れませんか。」



- 子供たちは自分の考えを伝えたいと感じたか。
- 対話の必要性がある課題設定だったか。
- 子供たちが話し合う目的や手段を明確にできたか。
- 子供たちの表現を生かしているか。
- 机間指導を通して意図的に指名しているか。
- 子供たちが練り上げのよさを感じる言葉かけができたか。
- 自分の力でやってみたいという新たな課題を準備しているか。

単元・一単位時間で身に付けたい力

ポイント4

子供の『分かった』『できた』『もっとやってみよう』（実感や達成感、更なる意欲等）が生まれる終末の工夫

- 1 『分かった』『できた』『もっとやってみよう』が生まれる工夫について
 - 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、学習のまとめや振り返る場面をどこに設定するのか、単元全体を見通してデザインすることが必要です。
 - 授業者には、『分かった』『できた』という実感や達成感のある学びにつなげるための「(学習の)まとめ」や、『もっとやってみよう』という学習意欲につなげるための「振り返り」などについての明確な視点と意図が求められます。



Before

- ・学習の見通しがもてず、受け身の学習で終わってしまう。
- ・学習課題を通して「何が分かったか」や「何を考えたか」が分からない。
- ・「何ができるようになったか」をメタ認知できない。
- ・今日の授業の感想を子供たちにただ単に発言させたり、教師がまとめたことをノートにそのまま書き写させたりするだけになっている。



After

- ・身に付けるべき資質・能力が明確になることで、単元を見通すことができ、学んだことを実生活や社会生活と結び付けることができる。
- ・学習課題を通して子供に学びの視点を与えることで、子供自身が「学び」を自覚し、自分自身の成長や学ぶ喜びの実感につながる。
- ・子供が自分の言葉や学習した内容を使って学びをまとめたり、振り返ったりすることで、新たな疑問や課題の発見につながり、学びを広げることができる。
- ・教師が子供の言葉を価値付けしながら学びをまとめたり、振り返ったりすることで、次の学びに向かう力を育むことができる。

『分かった』『できた』を実感し、
『もっとやってみよう』へ！

2 学習内容と学習状況をまとめ・振り返るために

(1) 終末における「まとめ」「振り返り」の在り方について

「まとめ」と「振り返り」については、これまでも大切に取組まれてきました。しかし、それぞれの目的が不明確なまま取組まれているという状況も見受けられます。そこで、「まとめ」と「振り返り」について、次のように整理しました。

「まとめ」「振り返り」の整理

	まとめ	振り返り
概念	子供が学習した内容を確実に身に付けることができるように、何を学んだのかを明らかにする活動	「学び」の価値や成果を自覚したり、「次の学び」に向かう問いや課題を明らかにし、学習意欲を高めたりするために、児童生徒が自らの学習を振り返る活動
なぜ必要か	子供が学習課題で分かったことを確認し、集団全体で共有したり、何を学んだかを実感し、深い理解につなげたりするため	「何ができるようになったのか」「何ができなかったのか」を子供たちに自覚させることで、習得した「知識・技能」を、「活用する力(思考力・判断力・表現力等)」や「主体的に学習に取り組む態度」につなぐため
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> ○単元を通して身に付けるべき資質・能力を明確にすること ○何を学ぶのかを明確にするために、その時間の明確な到達目標を設定すること ○指導と評価の一体化を図るため、「めあて」と「学習課題」との整合性を図ること ○子供の思考過程等が見える板書を残したり、丁寧なノート指導を行ったりすること 	<ul style="list-style-type: none"> ○子供自身が自分の学びを的確に見つめられるように、「何を振り返るのか」を明確にすること ○子供が、自分自身の学びを客観的に分析・修正・改善し、メタ認知できるように、自分の言葉で自分の学習を振り返ることができるようにすること ○子供自身が自分の学びの過程を的確に見つめられるように板書等で何を学んだのかを明確に示すこと

(2) 終末における「振り返り」の重要性について

「振り返り」は、子供たちが自分自身と対話し、「自分がその学習でどのように変わったのか」「新たな問いや課題は何か」「家庭学習や次の授業でチャレンジしたいことは何か」などを明確にすることをねらいとしています。

また、「まとめ」の活動において、学んだ内容を「知識・技能」として明らかにした後、「振り返り」の活動において「何ができるようになったのか」「何ができなかったのか」を児童生徒に自覚させることは、獲得した「知識・技能」を、「活用する力(思考力・判断力・表現力)」や「主体的に学習に取り組む態度」につなぐ上でも、重要な活動となります。

「振り返り」の視点の例

※「振り返り」の視点は、2～3点に絞り込むようにする。

- ① “いいな！”*と思った友達の考えは何か？
(“いいな！”の観点は、その時の学習のめあてや中心発問に対応して変わります。)
- ② “納得できなかったこと”“分からなかったこと”は何か？
- ③ 何ができるようになったか？ なぜ、できなかったのか？
- ④ 学習の前後で自分の考えや態度がどのように変わったか？
- ⑤ “新たな問い”や“課題”は何か？
- ⑥ “新たな問い”や“課題”をどのように解決したいか？
- ⑦ “学んだこと”や“気付き”を、生活や次の学習にどう生かすか？
- ⑧ 家庭学習で何を調べてみたいか？



※ 「振り返り」の発問の例

本時の「振り返り」では、

- ①分かったこと
- ②感想（日常場面と重ねて）
- ③参考になった友達の発言
- ④疑問に思ったこと（新たに考えた問い）

の4つを中心にまとめましょう。

これから学習する「14歳の自画像～夢や目標に向かって～」について見通しをもって、次の学習につなげることができるように、本時の学習を振り返りましょう。

※研究指定校（H31～R1）である大津町立室小学校及び御船町立御船中学校の研究実践の例です。

教科における「振り返り」の活動例



国語	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の成果や課題とその要因、課題の改善方法等を共有する。 ・課題を自覚することで、家庭学習や次時以降の授業につながる。
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の調べ方や学び方、結果を振り返る。 ・学習成果を学校外の他者に伝える。 ・新たな問い（学習課題）を見出したり、追究したりする。
算数・数学	<ul style="list-style-type: none"> ・板書やノートを見て、次の点を振り返るようにする。 解決方法（よりよい解決方法はどれか） 解決結果（どんな考え方、答えだったのか）
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・科学的な言葉や概念を使って新しい事象を説明する。 ・学習内容と関連した事象を、日常生活の中に見出し、根拠をもとに説明する。 ・振り返り問題で、身に付けた学習内容を確認する。 ・問題解決（探究）の過程を総合的に振り返る。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の目標とともに、単元目標やCAN DOリストに照らして、「英語を用いて何ができるようになったか」を振り返るようにする。

ポイント5

主体的・対話的で深い学びへとつながるICTの効果的な活用

1 ICT活用について

- 目的を明確にしてICTを授業で活用すると大きな効果が期待できます。
- 子供たちにとっては、実物の写真や資料が電子黒板などで提示されると、わくわくして学ぶ意欲が高まったり、タブレットパソコンですぐ調べたり、書き込んで記録したり、写真や動画で記録したりするなど学習への理解を助けたりしてくれます。
- 教師にとっても、教材の準備などを効率的にすすめることができます。また、「授業で子供たちに本物に出会わせたい」など、授業の可能性を広げたり、子供たちにとって分かりやすい授業を工夫したりすることができます。
- ただし、活用次第では逆効果になる場合もあります。例えば、教師側からスライドなどで一方的に大量の情報を提示し、説明するだけでは、子供の主体的な学びは妨げられてしまいます。そのようなことに陥らないように、「子供の学び」の側に立って、単元全体を通して、ICTをどこでどのように使えば目標の達成に効果的か、単元の構想を立てて活用していくことが大切です。



Before

- ・せっかく電子黒板やタブレットパソコンがあるのに、授業での効果的な活用が分からない。
- ・ICT機器が教室にあるのに、使われていない。
- ・1時間の授業中ずっとタブレットパソコンを使っている。



After

- ・単元・題材や本時において、効果的な場面で目的に応じたICT機器が活用されている。
- ・目的に応じていつでも教師や子供たちが使えるように管理されている。
- ・相手意識、目的意識をもって、効果的な場面で使っている。

2 授業でのICT活用における留意点

- 「ICT活用」そのものが、目的になっていませんか。授業におけるICT活用が、逆効果にならないように、以下のチェックリストで、ポイントを明確にした活用を心がけましょう。

☑学習活動

- 授業者がスライドで一方的に説明する授業で、子供の主体的な学びが妨げられる。
- 講義形式の授業で、子供が話し合ったりノートにまとめたりする時間が十分でない。
- 板書がおろそかになり学びのあとが整理されず、授業全体の振り返りができない。

☑提示資料

- 提示した資料が焦点化されておらず、子供がどこを見ればいいのか分からない。
- 文字や画像が小さく、教室の後ろからははっきり見えない。
- 提示するスライドの量が多く、次々に切り替わることで集中力が途切れてしまう。

3 主体的・対話的で深い学びへとつながるICTの活用例

- 先進的に取り組んできた学校の取組を参考に、ICTの効果的な活用例を紹介します。

①単元〈題材〉や1単位時間の導入場面で興味・関心を高め、学習課題・めあてを明確に把握させ、能動的な学びにつなげる 〔電子黒板、デジタル教科書等の活用〕

子供たちの『なぜ』『おそらく』が生まれる導入では、子供たちの驚きや発見があり、矛盾、困惑、葛藤を抱かせる教材を提示し、知的好奇心を高め、課題意識をもつことができるようにしましょう。

特に、指導者用のデジタル教科書には、映像資料や写真、イラスト、グラフなど豊富なコンテンツが組み込まれ、拡大して提示することができ、子供たちの学習意欲を高めることができます。



小5「理科」
雲の画像を拡大提示し、台風の進路や天気の変化について予想させる

②学習課題や個々の興味・関心に応じた調べ学習〔端末の活用〕

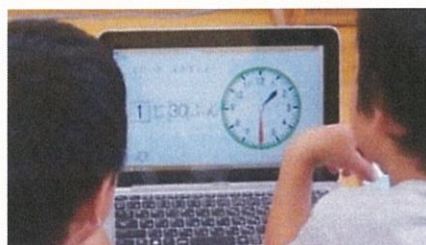
子供たちが自ら問いをもち、課題の解決に向かっていくためには、子供たち一人一人の興味・関心に応じた調べ学習ができるようなツールが必要です。一人一台の端末（タブレットパソコン）の環境整備を行いつつ、学習形態を工夫するなどして個の学びが充実するよう工夫しましょう。



小6「社会」
動画や写真などの複数の資料を読み取り、発表資料を作成する

③知識・技能の定着を図ったり、自分の課題（つまずき）に応じて取り組んだりする〔端末の活用〕

確実に定着させたい知識・技能などについては、子供一人一人のペースで、何度も繰り返し練習したり、ドリルに取り組んだりするなど個に応じて取り組むことができるのも、ICTの強みの一つです。



小1「算数」
Web上のドリルソフトで時計の読み方の習熟を図る

単元・題材のまとまりによる学習過程
〈一単位時間による展開〉

④「本物」に触れることで実生活や実社会への関心を高め、更なる能動的な学びにつなげる [オンラインによる遠隔授業等]

「この学習では、ぜひ専門家の人の考えや経験を聞かせたい」と思っても、一度きりの交流で終わったり、遠距離のため実現できなかったり、または、日程の調整がつかなかったりなど困難な場面があります。

テレビ会議システムを使ってオンラインで結ぶと、このような課題が解決でき、より一層、実生活や実社会への関心が高まります。



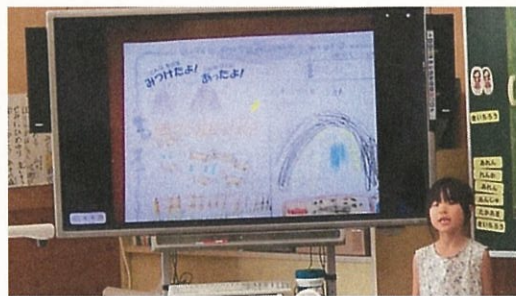
小6「理科」

JAXAの研究者とテレビ会議を実施し、星や天体への興味を高める

⑤相手意識・目的意識をもって、まとめ、発信（発表）し、コミュニケーションを行う [電子黒板・端末の活用]

双方向性のあるICT機器を有効に活用することで、子供たちは相手意識・目的意識を高め学びに向かい、まとめたり、発信（発表）したり、コミュニケーションしたりする活動をより能動的なものとすることができます。

学習の中で、インプットしたものを、アウトプットすることで、学んだことを自分のものにすることができます。子供たち自身がいろいろなツールを駆使して、表現できるようにしましょう。



小1「生活」

実物投影機でまとめたワークシート等を拡大して示し、発表する

⑥考えを共有し自己の考えを広げ深めたり、学びを振り返り次の学びへとつなげたりする [電子黒板・端末の活用]

友達の考えを知ることで、自己の考えを広げたり深めたりすることができます。

考えを書いたノートを実物投影機などを使って大きく提示すると瞬時に全体で共有することができます。端末を使って、自分の考えを打ち込み、電子共有ボードなどのソフトで共有することができます。

また、学びの振り返りを記録し、自分だけの電子ポートフォリオとして学びの足跡を残すこともできます。



小6「総合的な学習の時間」

作成したプログラミングの工夫点に関する考えを共有し、相互評価する



ここで示した取組以外にも、多くの活用が図られています。県教育委員会のホームページをぜひご覧ください。

熊本県教育情報システム (CoLaS)

検索

重点2 「単元のゴールの姿」に向けて、「単元・題材のまとめり」で授業を構想しましょう【学習構想案】

熊本の授業づくりの理念の下、
「確かな指導観に基づき、子供の学びの側から学習を構想する」
～すべての子供たち一人一人の「学び」は、教師の「指導する（教える）」授業を
子供の学びの側から「構想する」学習として捉え直す中で、見えてくる～

- 新学習指導要領では、単元など内容や時間のまとめりを見通して授業を構想することが求められています。
- 「主体的・対話的で深い学び」は、1単位時間の授業の中で全てが実現されるのではなく、単元など内容や時間のまとめりの中で、学習を見通し、振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考えて、授業を構想していくことが大切です。
- そこで、「熊本の学び」では、子供の主体的・対話的で深い学びの姿、そして単元の最後の学習を終えたときの子供の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）を具体的にイメージし、その実現に向けて単元のまとめりで授業を構想することを大切にしていきます。
- そのため、本県では、これまでの一般的な学習指導案の項目・内容に、次の3点を加えたものを「学習構想案」とし、推進していきます。

大切にしていきたい項目

- ① 単元終了時の子供の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）
- ② 単元を通した学習課題（単元の中心的な学習課題）
- ③ 単元で働かせる見方・考え方

- 各学校では、本プランで示す学習構想案を参考にして、学校の実情に応じて創意工夫するなど、積極的に取り組んでいただくことを期待しています。

まず、学習構想案についてQ&Aの形で示します。

Q1 これまでの学習指導案からどう変わるのですか？

- 本プランで示す学習構想案は、これまでの学習指導案で示してきた項目・内容を含んでおり、大きく変わるものではありません。
具体的に、これまでの一般的な学習指導案と比較してみると、右ページ上段の表のようになり、主な違いは次の2点です。
- 項目・内容に関して、「大切にしていきたい項目」の3点（表の下線部分）を追加していること。
- 表記の順序に関して、単元構想の中心となる大切な項目を「1 単元構想」としてまとめ、最初に明記していること。（小研等での略案作成の参考としていただくことも想定しています。）

これまでの一般的な学習指導案	本プランで示す学習構想案
1 単元名	1 単元構想 ○単元名
2 単元について (1)単元観 (2)系統観 (3)児童の実態 (4)指導上の留意事項	○単元の目標 ○単元の評価規準 ○単元終了時の児童の姿(単元のゴールの姿・期待される姿) ○単元を通した学習課題(単元の中心的な学習課題) ○本単元で働かせる見方・考え方 ○指導計画と評価計画
3 単元の目標	2 単元における系統及び児童の実態 ○学習指導要領における該当箇所
4 単元の評価規準	○教材・題材の価値 ○本単元における系統
5 指導計画及び評価計画	○児童の実態 3 指導に当たっての留意点
6 本時の学習 (1)目標 (2)展開	4 本時の学習 (1) 目標 (2) 展開

Q2 学習構想案で示されている項目・内容や形式、表記の順番等については、すべて同じように作成したほうがいいのですか？

- 本プランで示す学習構想案はあくまで推奨モデルですので、全ての項目・内容や形式、表記の順番等に従って書くというものではありません。各学校では、校内研究の内容とも関連させて研究を深め、本プランで示す項目・内容等を参考として取り入れ、可能な限り導入をしていただければと考えています。
- ただし、「熊本の学び」では、単元を通して学んだ子供の姿を具体的にイメージし、単元のまとまりで授業を構想すること(単元構想)を大切にしたいということから、「大切にしていきたい項目」の3点については、各教科等の特質及び単元の内容に応じて明記していただくようお願いします。
※略案として作成する場合も、この3点については明記をお願いします。
※教科等の特質及び単元の内容によって「単元を通した学習課題(単元の中心的な学習課題)」の設定が難しい場合は、明記しないことなども考えられます。
- 大切にしてもらいたいことは、学校の実態に応じて工夫・改善を重ね、「熊本の学び」の理念の実現に迫る授業づくりへとつなげることです。

Q3 今回、「具体の評価規準」として示されたのはなぜですか？

- これまで本県では、「評価規準」とともに、国が示した評価規準に基づき、目標に達したかどうかを具体的に判断する「より精度の高いものさし」として、子供の学びを見取る際の量的な「評価基準」を設定してきました。
- 今回の新学習指導要領において、目標及び内容が3つの柱で整理されるとともに、評価の観点も3つに整理され、内容のまとまりごとの「評価規準」が示されました。
- これに基づき、より精度の高い質的な評価規準が求められています。本県においても、内容のまとまりごとの「評価規準」を設定し、評価場面を明確に示した単元構想を提案しています。

ここからは、「学習構想案」作成の際の留意事項について示します。

第〇学年 〇〇科 学習構想案

日 時 令和元年〇〇月〇〇日 (〇) 第〇校時
 場 所 〇年〇組教室
 指導者 教諭 〇〇 〇〇

1 単元構想

単元名	教科・領域に応じて、「単元」か「題材」かが決まります。教科・領域の特質に応じて設定してください。		
単元の目標	(1)	(2)	(3)
単元の評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	「熊本の学び」では、この3項目を設定することがポイントです。ここで設定した子供たちの学びの姿や学習活動について、校内研修等で検証しましょう。		
単元終了時の児童の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）			
単元を通した学習課題（単元の中心的な学習課題）		本単元で働かせる見方・考え方	
指導計画と評価計画（〇〇時間取扱い 本時〇/〇〇）			
過程	時間	学習活動（「問い」を設定しても可）	評価の観点等 ★は記録に残す評価の場面で「具体的評価規準」を記載
		具体的な学習活動を設定します。「問い」で学習活動を方向付けることもできます。一単位時間ごとの「問い」を示すと、子供たちとの共有も図られます。	質的な評価の精度を上げるために、「具体的評価規準」を設定します。国立教育政策研究所から提示される例を参照に設定しましょう。 ※ 単元全体を見通して、子供たちの学習状況について記録に残す評価の場面を精選し、適切に設定しましょう。

内容の「ま」と「り」ごとに評価規準を設定します。各教科・領域で確認しましょう。

単元や題材における内容や時間の「ま」と「り」を見通して、子供たちの学びを構想します。「過程」は、教科等の特質や学校の研究内容等に応じて設定してください。

※ 学習を構想する大切な箇所です。教師が教える場面はどこか、子供が学習を見通したり、振り返ったりする場面はどこか、ICTの活用場面はどこか、具体的に設定しましょう。学校の研究内容に沿ったものにすることが大切です。

※ このページは、略式の学習構想案で作成する際は、省略できる項目を掲載しています。ただし、詳細に作成する際は、教材研究を深めたり、子供たちの実態をつかんだりして、より精度の高い学習構想案を立てることができるようにしましょう。

2 単元における系統及び児童の実態

学習指導要領における該当箇所(内容、指導要領等)		
教材・題材の価値		
本単元における系統		
児童の実態(単元の目標につながる学びの実態)		
■本単元を学習するにあたって身に付けておくべき基礎・基本の定着状況		
■本単元の学習に関する意識の状況		
■考察		

単元の系統については、縦に、他学年でのつながりを、横に当該学年での他単元とのつながりを示しています。特に、単元名だけではなく、その単元で身に付けるべき基礎的・基本的な知識及び技能等を示すとより系統が明確になります。

単元に関する学習の状況や子供たちの意識等を示します。事前調査と比較し、学習後の変容等が把握できるように必要な項目を設定することも大切です。

例えば、全国学力・学習状況調査や県学力・学習状況調査等の結果、調査問題を活用したレディネステスト等を基に、本単元・題材の目標等を達成する上で身に付けておくべき基礎的・基本的な知識や技能等の定着状況を示します。
(教科の特質や単元の内容に応じて設定してください。)

3 指導に当たっての留意点(「校内研修の取組の視点」等から指導上の留意点等について明記)

-
-
-
-

※「人権が尊重される授業づくりの視点から」等(学校が設定する項目からそれぞれ明記)

※ 「指導に当たっての留意点」については、校内研修(研究の視点)等による授業改善の方向性等について、焦点化して示しましょう。

また、人権教育の視点、道徳教育との関連、キャリア教育との関連など、学校等で設定する視点を示しましょう。

カリキュラム・マネジメントの視点から、学校で設定した教科等横断的に育成を目指す資質・能力について明記することも考えられます。

4 本時の学習
(1) 目標

『問い』を生み出す手立て等」や「言語活動及び設定の意図」など、ここに示しているのは指導上の留意事項の例です。
作成する際の参考にしてください。

(2) 展開

過程	時間	学習活動 (◇予想される児童の発言)	指導上の留意事項 (学習活動の目的・意図、内容、方法等)
	5分	1 ① ◇ 【めあて】	○ ○ (「問い」を生み出す手立て等) ○ (見方・考え方を働かせて課題解決に向かう方向付け) ○ (課題解決に向けた見通しを持つ手立て) ○
		② ◇ 【学習課題】	
	5分	2 ① ◇	○ ○ (個に応じた支援) ○ (課題解決に粘り強く取り組みようとするための手立て等) ○ ○ (言語活動の設定及び設定の意図) ○
		② ◇ 【期待される学びの姿】	
終末	10分	3 ◇ 【まとめ】	○ ○ 【到達していない児童への手立て】 ○
		◇	

本時の目標とめあて、学習課題との整合性を図り、子供たちと共有できるように、分かりやすく提示しましょう。

本時の中心となる学習活動を通して、子供の「期待される学びの姿」を具体的に設定しましょう。

※ 単元・題材における内容や時間のまとまりの中で学習を構想し、必要な場面で「まとめ」や「振り返り」の活動を設定しましょう。
ただ「振り返り」のではなく、何をどのように振り返るのか、ねらいを持って振り返らせることが大切です。

【参考】 このページは、参考までに示しています。
必要に応じて、板書計画を立てたり、ICTを活用する計画を立てたりすることが考えられます。
日常の授業では、主に板書計画を作成して授業に臨むことが考えられます。

【板書計画】

※ 板書計画により、「問い」（学習課題・学習問題）によって引き出された子供たちの反応を想定しておくことで、子供たちのつぶやきを拾い上げたり、ゆさぶりをかけて学習への意欲を高めたり、新たな問いへつなげたりすることができます。

【ICT活用計画】

例：教師による教材提示の計画、ICTを活用した発表、まとめ等による考えの共有の計画等

ICTの活用については、P43～44の「主体的・対話的で深い学びへとつながるICTの活用例」を参考に、効果的な活用について計画を立てましょう。

※その他 課題解決を図る情報収集計画、検定結果やパフォーマンスの記録計画など（シーンに応じて活用計画を立てる）

【見方・考え方を働かせて解く適用問題等の計画】

例：単元の終末では、見方・考え方を働かせて次の学習に取り組む

※ 学力調査問題等の他にも、実生活からリアリティーのある問い（学習課題・学習問題）を設定し、子供が見方・考え方を働かせて、次の問題に取り組んでいくことができるようにします。